

第 46 回 公開研究発表会

'14
6.21

英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XIX)

個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (XIII)

発表会要項

聖徳学園小学校
聖徳幼稚園

教育目標

- 1 一人ひとりの子どもの個性を育てる
- 2 知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる
- 3 豊かな感性と自立心を育てる

お誓い三か条

- 一、われわれは 未来をひらく戦士となり
新しい世界を 開拓します
- 一、われわれは 恥と涙をわきまえて
光明正大に 行動します
- 一、われわれは 祖国の伝統を重んじ
祖国と人類のために つくします

発表会要項

主 題 英才教育の追究

- 創造的知能の開発と育成 (XIX)
- 個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (XIII)

- 平成 25 年度東京都児童生徒発明くふう展
において 25 回目の「学校賞」受賞

校外授業

小学校



オーストラリア国際交流の旅 (希望者)



お楽しみ会

スキー学校



聖徳祭



幼稚園



園外保育
(井の頭自然文化園)



イモ掘り



運動会



夏のお楽しみ会



おすもうさんとの楽しみ会

第46回 公開研究発表会に当たって

～知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育～

聖徳学園小学校長 加賀光悦
聖徳幼稚園長

「氷が溶けたら何になる？」という問いに対して、「水になる」という答えだけではなく、「春になる」と言った柔軟な発想を大切に育てていきたいという願いで、昭和44年（1969）に、個性の伸長と知能教育を基本にした英才教育を開始しました。以来45年間、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる教育」を目指して、

- 主体的に学ぶ態度、意欲と集中力の育成
- 知能開発～創造的知能の開発と育成～
- 一人ひとりの個性と能力に応じた指導～能力の限界への挑戦～

を重点にした教育活動を重ねてきました。

●意欲と集中力の育成で知能と学力の向上

我が国では最近、小学生から大学生に至るまで学力低下の問題が話題になっています。その原因として、子どもたち自身の学習意欲と集中力の低下が大きな要因ではないでしょうか。

知能や学力の向上はもとより、子どもたちが将来社会で活躍していく上でも重要な資質は意欲と集中力になるとの考えから、私たちは幼稚園から小学校低学年までは、まず意欲と集中力の育成に重点をおいています。積極的な意欲と集中力のある子どもの場合は、仮に学校での学習時間や内容が少なくなっても、それこそ「1教えたら10学ぼう」とする意欲を発揮して、自分から主体的に学習を進めていくことができ、また習得率も高くなるからです。

入園したばかりの年少児（3歳児）の知能あそびを見ていると、一つの遊びに集中できる時間はせいぜい15分から30分程度です。なかには、教師の説明はほとんど聞

けず、周囲のことが気になり立ち歩くなど、なかなか集中して取り組めない子もいます。それが3学期頃になってくると、ほとんどの子が40分ぐらいは集中が持続出来るようになってきます。年長児（5歳児）になると、与える教材（遊びの内容）さえ適切であれば、80分間の知能あそびの時間が過ぎて昼食の時間になっても、「もっとやりたい！」言って、遊びを継続することもしばしばです。

このように幼稚園時代は、一人ひとりの子どもをよく観察していると、見違えるように意欲と集中力が身についてくることが分ります。この幼児期の3年間の成長は、小学校入学後の3年間の成長の比ではありません。特に、高学年になっても意欲と集中力が十分身についていない子どもの学習指導は、大変苦勞が伴います。ですから、私たちは幼稚園と小学校の指導上の連携を深め、3歳児から3年生ぐらいまでは、意欲と集中力の育成、つまり主体的に学ぶ態度を育てることに重点をおいているわけです。

こうした意欲と集中力を育成していくためには、日頃から授業（遊び）研究を深め、授業内容や方法に工夫が必要になることは言うまでもありません。子どもたちが授業（遊び）に意欲的に集中して取り組む条件としては、

- 学習（遊び）内容に興味・関心があること
- 難易度が適切であること
- 学習内容に発展性があること

等が重要な要素になってきます。ですから聖徳では、平素から教材研究と教材・教具の作成にはかなり力を注いでいるのです。こうして低学年の間に、意欲と集中力を育成しておく、高学年になるにつれて学力もめきめきと向上してきます。

よく聖徳学園小学校の卒業生は、中学や大学への進学実績が高いが、どのような受験指導をしているのかと言ったような質問を受けます。学校では、特別な受験指導をしているわけではありませんが、受験においても意欲と集中力、知能教育の成果は、結果的に大きなプラスになっていることは事実です。このことは、中学受験より大学受験と上級学校になればなるほど、効果を発揮しています。

●創造的知能の開発と育成

意欲と集中力の成果は、学力の向上だけではありません。創造的知能の開発と育成にも大きな成果を発揮してきます。

創造性の教育成果は、評価することはなかなか難しいのですが、一例として発明協会が毎年実施している、「東京都児童生徒発明くふう展」での成果を紹介します。聖徳では、毎年夏休み明けの9月に自由研究展を開催します。これにはほとんど全員の児童が、自分の興味・関心に基づき課題を見つけて、それについてまとめたり製作した作品を出品しています。児童によっては、小学校6年間一貫したテーマで研究を継続して取り組んでいる者もいます。この中から、校内審査を経て「東京都児童生徒発明くふう展」に該当する作品を15点（1校あたり15点までに限定）出品します。その結果、毎年10点くらいの作品が入賞し、これまで25回「学校賞」を受賞しました。そして東京都代表として全国コンクールに出品され、毎年2～3名の作品が入賞しています。

こうした成果を過分に評価していただき、文部科学大臣から7回目の「創意工夫育成功労学校賞」を受賞いたしました。このように、創造的知能の開発と育成では成果を挙げてきたように思っています。この創造性開発と育成の条件を、これまでの実践結果から要約すると概ね次の通りです。

① 創造的態度を育成する

意欲・集中力・好奇心・根気・いろいろ工夫する態度等

② 個性を啓発して伸長する

③ 創造的知能を刺激し育成する

④ 直観力（直観的思考・ひらめき）を育成する

⑤ 個性と創造性を認め合える学校環境を整える

等です。本日の授業の様子から、少しでも汲み取っていただければと思います。

●個性と能力差に対応した複数指導（担任）制

子どもの個性や能力・発達段階は、一人ひとり異なることは言うまでもありません。これに対して一人ひとりにきめ細かな指導をしていくためには、まず少人数による学級編成が必要になってきます。少人数といっても、学校では子ども同士学び合い、刺激し合い、切磋琢磨しながら成長していく側面も大きいので、あまり1学級の人数を少なくすることには教育効果の上で感心しません。また、小集団でなければ、自分の力を発揮できないような子どもに育てても困るのです。

そこで聖徳では、1学級の人数を33名前後として、個人差が顕著な知能訓練や数学の授業において、2人担任制を試みています。これは一つの教室に2人の担任が入って授業を進めるわけですから、2人の担任の綿密な連携が前提になりますが、個別学習に重点をおく知能訓練や数学の授業では、かなり効果を発揮することが明確になってきました。

現在、複数指導（担任）制を実施しているのは、

幼稚園では、学級担任 カリキュラムあそび

小学校では、学級担任 知能訓練 ゲーム 工作 数学（1～3年生）です。

また、学年が進むにつれて能力差は段々広がってきますので、数学と知能訓練では3年生から、そして国語と英語は5年生から能力（習熟度）別にクラス編成して授業を進めております。そのために、一人ひとりの子どもがゆとりを持って授業に取り組み、各自の能力の限界に挑戦することが可能になります。

本学園では複数指導（担任）制のねらいを、

① できるだけ多く（複数）の教師の眼で一人ひとりの子どもを指導する

② 一人ひとりの子どもの個性と能力差に対応したきめ細かな指導をする

この2点にあります。本日の授業を通して、複数指導（担任）制の利点を見ていただけたらと思います。

以上の通り、聖徳の教育の基本的な考え方と本日の公開授業（保育）の視点を簡単にまとめておきました。私たちの趣旨を少しでもご理解戴ければ幸いです。

また、本日の授業（保育）内容につきましては、「懇談会」において、意見交換していきたいと思っております。どうぞお気軽にご出席ください。このところ学校教育のあり方について関心を集めておりますが、21世紀を生きる子どもたちの健全な成長を求めて、皆さん方と共に理想的な授業のあり方を追究していきたいと考えております。本日は、ご参会戴き誠にありがとうございました。

目 次

第46回 公開研究発表会に当たって	5
発表会要項 (時程表)	11
会場案内図	14

幼稚園の指導案

◇保育公開 〈9：15～10：00〉

本日の公開保育について	17
3歳児 (ほし組)「クラス活動 (知能あそび)」	18
3歳児 (はな組)「クラス活動 (造形あそび)」	20
4歳児 (そら・もり組)「体育あそび」	22
4歳児 (そら・もり組)「リトミックあそび」	24
5歳児 (つき・やま組)「知能あそび」	27
5歳児 (つき・やま組)「造形あそび」	31

小学校の指導案

◇授業公開 〈9：20～10：20〉

1年生 (くろしお組)「国語」	35
1年生 (はやぶさ組)「数学」	38
2年生 (はまかぜ組)「国語」	41
2年生 (わかしお組)「数学」	43
3年生 (あずさ・やくもA組)「知能訓練」	45
3年生 (あずさ・やくもB組)「知能訓練」	50
4年生 (つばさ組)「地理」	55
4年生 (みずほⅠ組)「英語」	58
4年生 (みずほⅡ組)「英語」	60
5年生 (あさぎり・しらすぎA組)「数学」	62
5年生 (あさぎり・しらすぎB組)「数学」	64
5年生 (あさま組)「歴史」	66
6年生 (ほくと組)「理科」	70

全体会 〈10：30～11：40〉

あいさつ	73
園児・児童発表 5歳児 歌 唱	
4年生 合奏唱	
研究発表「創造性を育むロボット教育 ～特別研究数学の実践から～」	

平成26年度の研究活動計画

研究部の活動計画	77
知能教育研究部の活動計画	78
国語科研究部の活動計画	79
数学科研究部の活動計画	80
英語科研究部の活動計画	81
理科研究部の活動計画	82
地理科研究部の活動計画	83
歴史科研究部の活動計画	84
体育科研究部の活動計画	85
音楽科研究部の活動計画	86
美術科研究部の活動計画	87
家庭科研究部の活動計画	88

研究発表会のあゆみ	89
-----------------	----

発 表 会 要 項

1. 主 題：英才教室の追究

創造的知能の開発と育成（ⅩⅨ）

個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（ⅩⅩ）

2. 時 程

	9:00 9:15	10:00	10:30	11:40 11:45	12:30
受付	保育公開（各保育室）	休憩	全体会（小学校4F講堂）	休憩	解散
1F	授業公開（各教室）		1. 園長・校長挨拶 2. 園児・児童発表 3. 研究発表	聖徳の教育 （小学校音楽室） 小学校 懇談会 （小学校4F講堂） 幼稚園 懇談会 （小学校3Fやくも組教室）	
	9:20		10:20		

3. 内 容

(1) 授業公開及び保育公開

◇ 保育公開（幼稚園 9:15～10:00） ※4・5歳児は、興味・関心に応じた選択制になっています。

年齢	組	領 域	あそび設定の視点	あそびの題目及び内容	会場	頁
3歳	ほし	クラス活動 (知能あそび)	一人ひとりの興味・関心を育む複数指導	同一色探し ～びったり同じ色を見つけよう！～	ほし	18
	はな	クラス活動 (造形あそび)	子どもたちの興味・関心を引き出す活動	大きな木を作ろう ～スタンプを楽しもう～	はな	20
4歳	そらもり	体育あそび	一人ひとりの発達段階に応じた二人指導	跳び箱あそびにチャレンジしよう！ ～基礎感覚を養う～	ホール	22
		リトミックあそび	一人ひとりの想像力を豊かにする自由表現	雨だれポツタンの冒険 ～音のニュアンスを感じよう～	そら	24
5歳	つきやま	知能あそび	一人ひとりの図形的な構成力を養う二人指導	『三色パズル』 ～形の組み合わせ方を工夫して考えよう～	やま	27
		造形あそび	一人ひとりの創造力を引き出す造形あそび	木工づくりに挑戦 ～ビー玉転がしゲームを作ろう～	つき	31

◇ 授業公開（小学校 9:20～10:20）

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
1年	くろしお	国 語	音感語を様々に捉える一人ひとりの個性を發揮させる指導	ことばから連想する音感語を考えよう	くろしお	35
	はやぶさ	数 学	等号不等号を使い創造的知能の開発育成を目指した指導	「式の大小ゲーム」等号不等号に合う数字カードを工夫して出し勝利を目指そう	はやぶさ	38
2年	はまかぜ	国 語	一人ひとりの個性（興味・関心）に応じた学習指導	なぞなぞ詩をつくろう ～なぞなぞの仕組みを使って詩を作ろう～	はまかぜ	41
	わかしお	数 学	一人一ひとりの能力に応じ、柔軟な思考を育てる学習指導	『かけ算パズル』4つの数を使って、かけ算・混合算を利用して12を作り出す。	わかしお	43

学年	組	教科	授業設定の視点	授業の題目及び内容	会場	頁
3年	あずさ	知能訓練 A	柔軟な思考の開発と育成を目指した指導	『熟語点数置き換えゲーム』 ～高得点をめざせ！～	やくも	45
	やくも	知能訓練 B	一人ひとりの能力に応じて見通し力を引き出す二人指導	線の特徴を手掛かりにして、線路図を完成しよう！	あずさ	50
4年	つばさ	地 理	地図を通して、一人ひとりの創造的思考を育てる指導	島の地形図を読み取る中で、土地の様子や人々の生活をイメージさせていく。	つばさ	55
	みずほ	英 語	一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習	動物の特徴を表す英語表現を様々な活動を通して楽しく身につける。	みずほ ほくと	58 60
5年	あさぎり	数学 A	一人ひとりの能力に応じて規則性を発見する学習指導	『ピラミッドの引っこし』円盤の枚数と移動の回数の変化から規則性を発見する。	しらさぎ	62
	しらさぎ	数学 B	一人ひとりの能力に応じて論理的思考を深める学習指導	『確率マジック』を題材にして、ゲームの勝率の秘密について考えていく。	あさぎり	64
6年	あさま	歴 史	興味・関心といった視点から先入観を乗り越える学習	江戸時代、厳しい統制の中においても息づく農民や町人の生活を理解する。	あさま	66
	ほくと	理 科	一人ひとりの個性に応じた探究活動	表面張力を左右する要因を予想し、自ら実験を計画し検証していく。	理科実験室	70

(2) 全体会（会場：講堂 10：30～11：40）

- * あいさつ 園長・校長：加 賀 光 悦
- * 園児発表 5歳児 歌 唱
4年生 合奏唱
- * 研究発表 「創造性を育むロボット教育 ～特別研究数学の実践から～」
教頭・数学特別研究担当：和 田 知 之

(3) 懇談会（会場：講堂・音楽室・やくも組教室 11：45～12：30）

- * 懇談会は、下記の三つの分科会に分かれて行います。

分科会名	主 題	主な出席教員
聖徳学園の教育 (音楽室)	聖徳の教育の特色 (聖徳学園小学校・幼稚園の概要及び入園、入学についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)	学校長 幼稚園担当者 小学校担当者
幼稚園教育 (やくも組)	授 業 を も と に 本 日 の 保 育 ・	創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (保育内容についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)
小学校教育 (講堂)		創造的知能の開発と育成を目指した学習指導 個性と能力差に対応した複数指導（担任）制 (教科教育についてお知りになりたい方は、こちらの懇談会にご出席ください。)

*** 総合案内（9：00～10：30）**

6号館2F（1年はやぶさ組前廊下）に、教職員・案内役が待機しております。教室の場所、授業案内等、ご質問がございましたら、お気軽にお声がけください。

また、本日の内容及び本学園の教育についてのご意見やご質問がありましたら、懇談会へ是非ご参加ください。そちらでお受けいたしております。

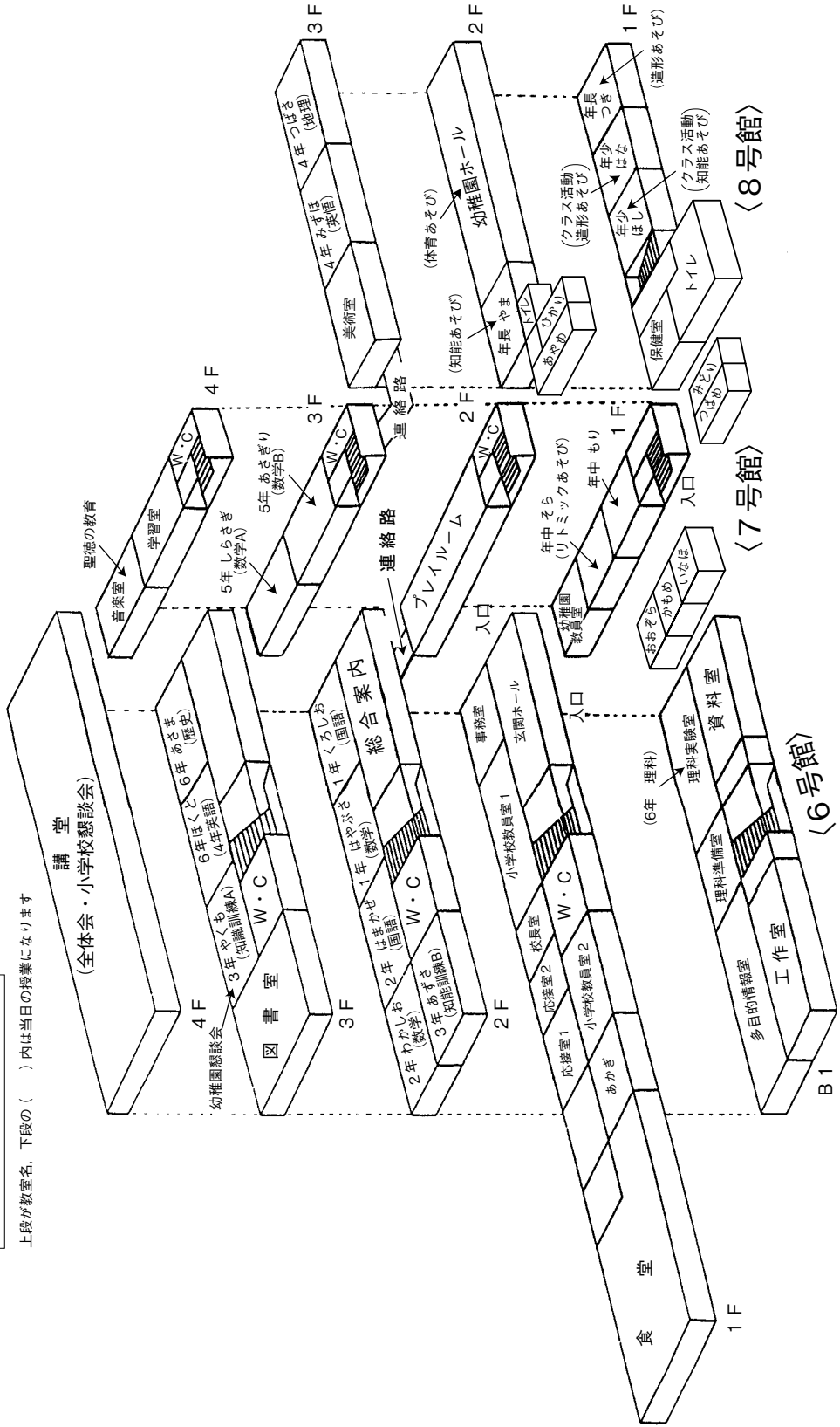
*** 参考文献**

- 「聖徳の教育」 聖徳幼稚園・聖徳学園小学校刊
- 「数学教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）
- 「国語教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）
- 「地理教材シリーズ」 聖徳学園小学校刊（実費にておわけします）

聖徳学園 幼稚園 案内図

6号館と7号館は2階で連絡しています

上段が教室名、下段の()内は当日の授業になります



幼稚園の部

本日の公開保育について

本園では、「自由保育」を実施しておりますが、その主な活動は、

自由あそび

カリキュラムあそび

の2つの方法で進めています。

カリキュラムあそびは、

- ◇ 知能あそび
- ◇ 体育あそび
- ◇ リトミックあそび
- ◇ 造形あそびの4つのあそびがあります。

4歳・5歳児は、この中の4つのあそびの中から2つのあそびを設定しました。

園児は2つのあそびの内容を担当の先生より聞いて、自分の好きなあそびの方を主体的に選択して遊びます。

3歳児は、普段は、4つのカリキュラムを一週間かけて順番に実施しています。本日は年齢や実態を考慮して、クラス活動の中でカリキュラム遊びを取り入れて、進めています。

本日の活動は下記の通りです。

		9時15分～10時00分	内 容
3歳児	ほし・はな	ほし	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス活動 (知能あそび) ・同一色探し ～ぴったり同じ色を見つけよう！～
		はな	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス活動 (造形あそび) ・大きな木をつくろう ～スタンプを楽しもう～
4歳児	そら・もり	<ul style="list-style-type: none"> ・体育あそび ・リトミックあそび (選択性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・跳び箱あそびにチャレンジしよう！ ・雨だれポットの冒険
5歳児	つき・やま	<ul style="list-style-type: none"> ・知能あそび ・造形あそび (選択性) 	<ul style="list-style-type: none"> ・三色パズル ・木工づくりに挑戦

選択の時間 9時00分から9時15分 子どもたちが、内容説明を聞いて選択します。

選択の場所 4歳児 そら組にて行います。

5歳児 幼稚園ホールにて行います。

クラス活動 (知能あそび) 指導案

9:15～10:00 於:ほし組保育室

※通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に知能的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者 松 浦 雅 美
大 下 真由美
飯 濱 久美子

1. 年 齢:3歳児 (ほし組)
2. あそび設定の視点:一人ひとりの興味・関心を育む複数指導
3. 主 題:同一色探し ～びったり同じ色を見つけよう!～
4. 主題について

知能あそびでは「楽しく遊びながら知的好奇心を育て、考える力(幅広い思考力)を育てていく」というねらいを基に活動を進めている。特に3歳という低年齢児が、知能的な遊びに楽しく向かえる様、いろいろな手作り教材を取り入れて日々の活動を行っている。

知能あそびで触れたことをきっかけに、切り紙(折り紙を折ったものに、はさみで切込みを入れて様々な模様を作っていくもの)に夢中になっている姿や、スリーヒントクイズを考えてお友達に問題を出している姿を見ると、正に、遊びを通して考える力を発揮していることを実感でき、嬉しい気持ちになる。

本時は、こういった“考える力”を育てるきっかけ作りの一つとして、同一の色を見つける遊びを行う。知能因子で表わすならば『記号で単位を評価する』遊びである。指導者が提示した色のものと、全く同じ色のものを、いくつかの選択肢の中から選び出すことにより、“評価力=比較判断力”を育てていく。(例えば、電車の時刻表を調べる時などにはこの評価力が要される…と付け足すと、より身近な知能因子に思えるのではないだろうか。)

最初は選択肢も少なく、捉えやすい色味のものからスタートし、後半は選択肢を増やして、似通った色味の中からびったり同じものを探していくという難易度を付けながら、子どもたちが楽しく取り組める様、温かく見守っていきたいと思う。

5. 園児の様子

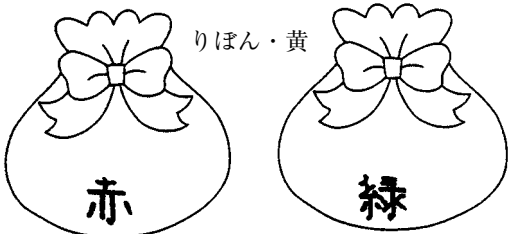
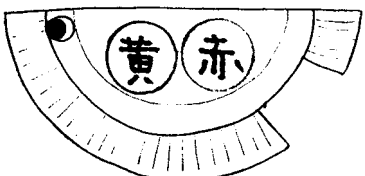
入園して約2ヶ月の子どもたちは、毎日好きな遊びを見つけながら幼稚園生活を楽しめるようになってきた。自由あそびでは、おままごとや電車、粘土でおだんご作り、砂場で山作り、園庭で虫探しなどに夢中になっている。遊びを通して、お友達の名前を覚え、少しずつ関わりも見られるようになってきた。4つのカリキュラムあそびに対しても、それぞれのあそびの楽しさを理解し、興味を持って取り組んでいる。知能あそびに於いても、好奇心旺盛な瞳を輝かせながら楽しむ姿が印象的である。ただ、まだ年齢的なこともあって、長い時間の集中が難しかったり、いつもとは違う状況に戸

惑ったりすることも予想されるので、子ども達の様子を複数指導の目できちんと受け止めていきたい。

6. 本時のねらい

提示された見本と、ぴったり同じ色のものを探し出すことにより、記号で単位を評価する能力を育てる。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び活動	指導上の留意点
<p>1. 挨拶・出席確認</p> <p>2. 展開</p> <p>(1) 提示された絵カードと、自分の絵カードを見比べ、同じ色のものを見つける。 「ほし組さんにプレゼントが届きました！2つあります。同じ色の袋を見つけましょう。」等。 (提示例)</p>  <p>(2) 提示された魚と、同じ色の魚を釣る。 (提示例)</p>  <p>3. 片づけをする。</p> <p>4. おわりの挨拶をする。</p>	<p>○出席確認をしながら、本日の健康状態等も把握する。</p> <p>T1：子どもたちが楽しく取り組めるように、お話し仕立てにしながら提示カードを出す。</p> <p>T2・T3：それぞれ、子どもたちの間に入り、聞きもらしている子どもがいないか、また、同一の色がきちんと判断出来ているかを把握し、適宜助言をする。</p> <p>T1：色味が複雑になるので、色を確認しながら丁寧な提示を心掛ける。</p> <p>T2・T3：魚がいる池に子どもたちが集まるので、正しく同じ魚が選んでいるかを把握すると共に、仲良く楽しく取り組んでいるかを留意する。</p> <p>○すみやかに片づけられる様、指示する。</p> <p>○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。</p> <p>○適宜、自由あそびへと移行するが、魚釣りで引き続き遊びたい場合は、T1を中心に、遊びを続ける。</p>

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し本時のねらいが達成できたかどうかまとめ、次回へとつなげる。

クラス活動 (造形あそび) 指導案

9:15～10:00 於：はな組保育室

*通常、年少組では、クラスごとに自由あそびと4つのカリキュラムあそびを行っているが、本時は、年齢や実態等を考慮して、クラス活動の中に造形的な遊びを取り入れながら進めていく。

指導者 荒井明子
田崎満利恵

1. 年 齢：3歳児 (はな組)
2. あそび設定の視点：子どもたちの興味・関心を引き出す活動
3. 主 題：大きな木を作ろう～スタンプを楽しもう～
4. 主題について

年少組の造形あそびでは、絵を描くだけでなく、手に絵の具を塗ってスタンプしたり、「ローラー」を使って描いたり、いろいろな技法で絵の具を楽しんできた。今回は木をテーマに「スタンプあそび」を楽しみながら、はな組の保育室に大きな木をみんなで作り上げていく。いろいろな材料を使ってできる模様を楽しみながら、個々の作品がひとつの大きな作品になっていく様子を楽しみたい。

5. 園児の様子

初めての集団生活ではあるが、興味関心が強く、何事も喜んで取り組む姿が見られる。自由あそびでは電車やブロックで遊んだり、おままごとではお母さんのまねをして料理を作ったり、友だちと関わりを持ちながら遊んでいる。造形あそびでは、手先をたくさん動かしながら感触を楽しみ、作品になる喜びを感じているところである。

6. 本時のねらい

いろいろな材料を使ってできる模様を楽しみながら、木の葉や実を表現することを楽しめるようにする。

7. 本時の指導過程

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
1. 始まりの挨拶をする。	〈2人の指導者の動き〉 T1、T2：活動に入る挨拶をする。
2. 本時の内容の説明を聞く。	T1：本時の活動内容を説明する。 T2：子どもたちの聞く様子を観察し、個別に声をかけながら援助する。

<p>3. 木の葉や実を作ろう</p> <p>葉を作る</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 画用紙を配る。 ② クレヨンで葉の形を描く。 ③ 描いた線をハサミで切る。 ④ レモンの型でスタンプをする。 (緑・黄緑) <p>実を作る</p> <ol style="list-style-type: none"> ① キャップに粘土を詰めて、スタンプを作る。 ② 絵の具 (赤・オレンジ・ピンク・黄) を選んで、葉の画用紙にスタンプをする。 ③ 乾かす。 <p>4. 飾ろう 出来上がった画用紙を壁面に飾っていく。</p> <p>5. 片づけをする</p> <p>6. 出来上がった作品を鑑賞する。</p> <p>7. 挨拶をする</p>	<p>T 1: はさみの扱い方の説明し、配る。</p> <p>T 1、2: はさみを安全に使えるように指導する。</p> <p>T 1、2: スタンプの使い方は個別に指導しながら援助していく。</p> <p>T 1: 粘土をよくこねるように指導する。</p> <p>T 2: うまくこねることが出来ない子どもには援助していく。</p> <p>T 1: 実の形を考えながら、粘土をこねるように指導する。</p> <p>T 1: 出来上がりをみんなで楽しめるような雰囲気を作る。</p> <p>T 1、2: 安全に片づけができるよう声をかけていく</p> <ul style="list-style-type: none"> • 次回の活動に期待が持てるようにする。 • 適宜、自由あそびへと移行するが、引き続きスタンプあそびをしたい場合は、T 1を中心に遊びを続ける。
---	---

8. 評価

それぞれの子どもたちが意欲的に取り組み、それぞれの表現を楽しむことができたかを指導者間で確認し、評価していく。

体育あそび指導案

9:15～10:00 於：幼稚園ホール

指導者 佐藤 憲夫
久保 千春

1. 年 齢：4 歳児 (そら・もり組)
2. あそび設定の視点：一人ひとりの発達段階に応じた二人指導
3. 主 題：跳び箱あそびにチャレンジしよう！～基礎感覚を養う～
4. 主題について

跳び箱運動の中には、「開脚跳び」という跳び方がある。その開脚跳びができるようになるための基礎運動を行いながら、基礎的な技能を身につけていければと思う。

ストーリーとして、跳び箱の上にカニがいました。その場所をカエルが通り過ぎたいと思っています。さて、どうしたらうまく通れるでしょうか。

今回の跳び箱あそびでは、開脚跳びにつながる基本動作のカエル歩きや、跳び箱の台上にカニの絵を書き、カニの目を手で隠したりなど、色々な動きに挑戦していきたい。

5. 園児の様子

年中になり、アスレチックの他に鉄棒や雲梯、縄跳びなどに興味・関心を持って遊んでいる子ども達の姿が見られる。跳び箱は、まだあまり経験のない活動なので、今回体験していく中で親しみを持たせていきたい。

6. 本時のねらい

- ・跳び箱を使いながら、基礎感覚（腕支持感覚・跳躍力・バランス感覚）を養う。
- ・順番ややり方などのルールを理解しながら、楽しむようにする。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（リトミック・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9:10～9:15 場所：そら組

園児の活動	指導内容及び指導上の留意点	準備するもの
1. 整列 2. 準備体操	<ul style="list-style-type: none">・クラスごとに整列させる。・体をあたため、これからの活動が十分に行えるように準備体操をする。・教師の動きを見ながら行う。	

<p>3. 挨拶</p> <p>4. 本時の内容と説明</p> <p>5. ウォーミングアップ a) カエル歩き b) カエル歩き鬼ごっこ</p> <p>6. カエル乗り I (両足でジャンプし、手をついたら両足を広げ、膝を曲げて着地する。)</p> <p>7. カエル乗り II から 又はカエル降り (膝を伸ばしたまま乗り、その後、大きくジャンプ。)</p> <p>8. 整理体操</p> <p>9. 整列・挨拶・まとめ</p>	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> <p>～指導者の動き～ T 1: 子どもたちの前で見本を示す。 T 2: 巡回しながら一人一人の様子を見る。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 整列させて、元気よく挨拶ができるようにする。 • 本時の予定と注意事項を説明する。 • 手の外側に足がつくようにさせる。 • みんなでカエルになって、自由にジャンプしながら楽しめるようにさせる。 • カエルに変身し、跳び箱の台上のカニと友達になれるようにする。(近づき接近する) ※跳び乗る時に、手はカニの目を隠して、足はハサミの上に置くことで手足の位置を知らせる。 • I と同じ動作だが、II は膝を伸ばして乗るようにさせる。跳び箱に乗った後は、立ち上がり、大きくジャンプさせて、どこまで跳べるかを挑戦させる。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>～指導者の動き～ T 1: 子どもたちの前で見本を示しながら、リードしていく。 T 2: 子どもたちの補佐、もしくは上手に行なっている子なども認めていく。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> • 本時のまとめと次回の活動について話し、期待を持たせるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> • ビニールテープ • 跳び箱 • マット • 踏み切り板 各 2 台
--	--	--

8. 評価

- 跳び箱に興味を持って、楽しく取り組めたか。

主に、一人ひとりの取り組み姿勢や反応などを二人の指導者で確認しながら評価していく。

リトミックあそび指導案

9:15～10:00 於：そら組保育室

指導者 高井正恵
園山恵理子

1. 年齢：4歳児（そら組・もり組）
2. あそび設定の視点：一人ひとりの想像力を豊かにする自由表現
3. 主題：雨だれポッタンの冒険～音のニュアンスを感じよう～
4. 主題について

子どもたちはごっこあそびが大好きである。それは、自分のイメージの世界を持っていて、いつでも飛び込んでいくことができるからであろう。本時は、雨だれになってお散歩に出かけたら、いろいろな出来事に出会うという場面を設定した。それぞれの場面でいろいろな音を聴いて、子どもたちが自分が思った動きが表現できるように、一人ひとりの発想を受け止めながら、さらにイメージを広げられるように進めていきたい。

5. 園児の様子

新年度がスタートして2ヶ月が過ぎ、新しい環境にもだいぶ慣れてきた。

今では、毎日元気に遊ぶ姿が多く見られ、友だちとの関わりも増えてきている。

リトミックあそびにおいても、友だちと一緒に空間を楽しみながら、音を聴いて身体で表現する喜びを感じている様子が見られる。

6. 本時のねらい

イメージの世界で自分の思った表現が伸びのびとできるよう、またその中で即時反応や模唱、音の聞き分けなどを体験できるように進めていき、豊かな感性を伸ばしていきたいと思う。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（リトミックあそび・体育あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9:10～9:15 場所：そら組保育室

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
～準備：はだし・円になる～	○空間を広く使えるよう、環境を整える。 * T1：全体を通してピアノをベースに活動を進めていく。 * T2：子どもたちと一緒に活動し、様子を見ながら適宜援助していく。

1. リトミックあそびのうた・あいさつ

2. 模唱 (お返事はい)

『○○くん』→『はあい』

3. ウォーミングアップ

「♪」…歩く 「♪」…ゆっくり歩く

「♪」…かけ足 「♪♪」…スキップ

〈合図〉

☆高い音……頭の上で手をたたく

☆低い音……しゃがんで床をたたく

☆高低同時…片手を上にもう片手は床をたたく

☆リズム “♪♪♪♪♪♪♪♪”

…アクセントで手をたたく

☆呼びかけ “♪♪♪♪♪♪♪♪”

…友だちを見つけて握手する

4. 雨だれポッタンの冒険

～お話の流れ～

雲の上にいる雨だれポットンたち。雨が降ってきたので嬉しくてお散歩へ行きますが、大風が吹いてきて下にまっしぐら…すっかり元気をなくしてしまいますが、“ポッタンのうた”が心にある限り大丈夫！雲の上目指して冒険に出かけます。途中、かみなり大男の足音や大泣き川が流れてきて…無事に雲の上に戻れるのでしょうか？

～導入～雨のお話を聞く。

雲の上～まっさかさま

① ポッタンのうたを歌う。

【音のニュアンス】

⇒雲の上～長調～

② お日様にゆれる。

③ 雨のお散歩

⇒下に落ちる～短調～

○これからリトミックあそびを始める意識を持たせるようにする。

○出席確認及び本日の健康状態把握として、子どもに呼びかけ、きちんと音に合わせて答えられるよう配慮する。

* T 1 : 即時反応の合図を明確に子どもたちにわかり易いように伝える。

* T 2 : なかなか取り組めない子どもがいたら、励ましたり、一緒に行く。

* T 1 : 速さを変えていき、タイミングをつかませるようにする。

○友だちは何人でもよいという指示をする。

○雰囲気大切に、じっくりお話を進めていく。

* T 2 : 子どもたちのイメージが広がるよう、一緒に動くなど援助していく。

<p>④ 大風にゆれる。 ⑤ 力なく歩く。 ⑥ ポッタンのうたを歌う。～元気をだそう～ ⑦ 雲の上に帰るには・・・話し合う。</p> <p style="text-align: center;">冒険に出発</p> <p>【音の聞き分け】</p> <p>⑧ いろいろな即時反応を行う。 ・高音→ピチャン（とびはねる） ・STOP→友だちとくつつく。 ・かみなり大男の足音→</p> <p style="text-align: center;">高い山へ向けて</p> <p>⑨ 高い山に登る。 ⑩ 大泣き川に流される。</p> <p style="text-align: center;">山の上に到着</p> <p>……………実は！……………</p> <p>【模唱】</p> <p>⑪ 虹の色に音をつけて歌う。</p> <p style="text-align: center;">雲に帰ろう</p> <p>⑫ ポッタンのうたを歌いながら、お日様の光で……</p> <p>5. 終わりのあいさつ</p>	<p>○子どもたちの表現を認めていく。</p> <p>○子どもたちの意見やイメージを取り入れながら進める。</p> <p>○いろいろな友だちと関われるようにする。</p> <p>* T 2 : 安全面に留意する。</p> <p>○音の高さを手ではっきりつけて歌うようにする。 ○みんなで心を合わせて戻れるように声かけをする。 ○本時の活動を振り返り、次回にも期待が持てるようにする。</p>
---	---

8. 評価

活動後、本時の内容を振り返り、子どもたち一人ひとりの取り組みの様子を指導者間で確認し、本時のねらいが達成できたかどうかまとめて次回へとつなげる。

知能あそび指導案

9:15～10:00 於：やま組保育室

指導者 粕加屋 恵 子
永坂 圭 子

1. 年 齢：5 歳児 (つき組・やま組)
2. あそび設定の視点：一人ひとりの図形的な構成力を養う二人指導
3. 教材名：『三色パズル』～形の組み合わせ方を工夫して考えよう～
4. 本時刺激される知能因子：図形で体系を集中思考する (NFS)
5. 本時のねらい















指定された図形を作るには3色のピースのうちどの形を組み合わせればよいかを考えると、全てのピースをうまく組み合わせることでパズルを完成させることにより、図形で体系を集中思考する能力を育てる。

6. 教材について

子どもたちは好奇心が旺盛で、生活のどの場面においても、さまざまなことに興味や関心を持ち多くの経験をしている。車好きの子は、車の一部を見て車種を当てられたりする。電車が好きな子は車両の色や形に詳しいだけでなく、駅名や地名をよく知っていて漢字を読めることもある。興味のあることに集中して取り組み、一つのことを粘り強く考えることが意欲や集中力を高め、子どもの能力を開花させることにつながると考えている。

知能あそびでは、パズルやゲームなど考えるあそびを通して子どもたちの知的好奇心を刺激し、知識を教え込むのではなく、自分で考え楽しみながらできる教材を用意している。課外活動である英才教室では個別活動を通して知能因子を刺激し能力を開発しているが、幼稚園の知能あそびは集団での活動になるので、友だちとの協力ややりとりなども大切に、グループでいっしょに考えたゲームを楽しみながら取り組んでいる。

今回のパズルは、3つの正方形をそれぞれ3～4つに分割した形を使い、指定された図形を完成させるパズルである。はじめは、ピースを自由に組み合わせるいろいろな形を作ってみてもらう。正方形や長方形ができたり、組み合わせによっては家や動物など具体物に似た形ができることもある。いろいろ操作した後、冊子を使い指定された図形を完成させるパズルに取り組む。

パズルは始め、3色 (青  黄  赤 ) のうち、2色を使って完成させる。例えば、『青と★』なら、青い3つのピースともう1色の4つのピースを使うということである。青いピース    を台紙の形に当てはめながら、残りの形は黄ピース     を使うか、赤ピース     を使うか判断していく。指定された3つの青ピースをはめ込むやり方はいろいろあるのだが、どこに置くと他のピースがぴったり入るか柔軟に考えて推理することになる。

『★と★』では、3色のうち2色を使い完成させていくが、この場合もただ形を当てはめるだけ

でなく、どこにどの形を置けば残りのピースをうまくあてはめられるか見通して考えたり、うまくいかなかったら全く別のやり方を（転換して）考えていく必要がある。後半は全部のピースを使っ
てうまくあてはめていくが、いくつかの形で正方形になるなど筋道を立てて考えていけると完成し
やすくなる。

パズルは子どもたちに人気があるあそびだが、大人が取り組んでも面白く、柔軟に考えていかな
いとなかなか解けないことがある。子どもたちが楽しくパズルに挑戦していくことは、図形での構
成力を養い、工夫して考える力を引き出していくことになる。柔軟に工夫して考えていく力は、今
後、構成力とともにひらめきや推理力につながり、論理的な思考力の芽になると感じている。

いろいろ当てはめて試行錯誤して完成させる子、頭の中である程度組み立てて考える子など様々
だと思うが、時間いっぱい1人ひとりがパズルにじっくり取り組んでくれることを期待している。

7. 園児のようす

子どもたちは週に2回カリキュラムあそびの時間に2つの活動の中から知能あそびを選択する機
会がある。その日に行う内容の説明を聞き自分の意思で選ぶので、「たのしそうだ。」「やってみた
い。」とそれぞれ興味を持った子が集まってくる。

楽しみにして毎回のよう選択する子と、クイズやパズル、形作りなど、内容によって面白そう
だと興味をもったものだけ選択する子とがいる。選択回数の少ない子が、興味ある教材で選択した
後は続けて来るようになったということもある。男児が多い学年なので、集まってみたらほとんど
が男児ということもあるが、選択した女児も含めて皆活発に活動を楽しんでいる。

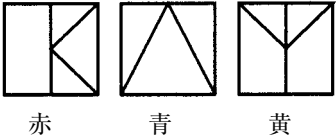
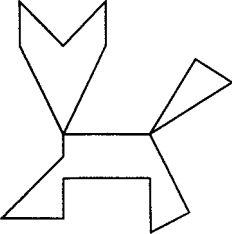
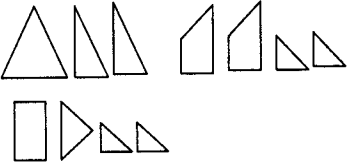
年中児の頃から、パズルやカード合わせなど個別に取り組む課題は特に、とても熱心に考え次々
と取り組んでいる。ゲーム形式の課題もやり方を理解してそれぞれ楽しく取り組み、「こんなに進
んだよ。」などと報告してくれる。一方で、ゲームで自分が勝ちたい、たくさん取りたいという思
いから、順番を待たず先に進めてしまったり、ルールを守れないということもある。年長の知能あ
そびでは、これからゲーム形式の課題も多くあり友だちとゲームをする機会も増えるので、ルー
ルを守り友だちのやり方やかけひき等も見てゲームを楽しめるよう留意して指導していきたい。

概念の課題の『スリーヒントクイズ』では、たくさんクイズに答えた後、こっそり答えを提示し
てグループでヒントを考え友だちに当ててもらおう活動があった。数名で協力しながらヒントを考え
る場面もあり、いろいろ思いついていた。こういう友だちとのやりとりで刺激を受け互いに成長し
ていくと共に、個別に考える形態では一人ひとりがじっくり考える時間と考える過程（プロセス）
を大切にして、思考力を養っていきたいと考えている。

8. 本時の指導過程

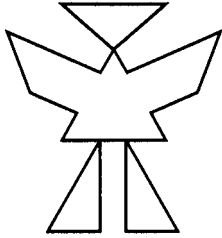
*最初に2つ（知能あそび・造形あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：00～9：15 場所：幼稚園ホール

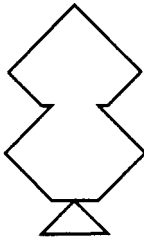
教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点等
<p>1. 始まりのあいさつをする。</p> <p>2. 全員で集まってすわり、説明を聞いて、パズルのやり方を理解する。</p> <div style="text-align: center;">  <p>赤 青 黄</p> </div> <div style="text-align: center;">  <p>あか・★</p> </div> <p>3. いすを出して机に向かい、パズルの準備をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 三色パズルのピースを自由に組み合わせていろいろな形を作ってみる。 <div style="text-align: center;">  </div>	<ul style="list-style-type: none"> • 出席確認して、本日の健康状態等を把握する。 <p>〈T 1〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 説明用の大きな提示と3色ピースを使い、パズルのやり方を理解させる。 <p>aはじめは、3色のうち2色を使って完成させる。</p> <p>b冊子に記載された「あか・★」などの★は、どの色のピースを使ったらよいか考えて（判断して）パズルを完成させる『もう1色』とする。</p> <p>c後半の「ぜんぶ」は、3色全てを使って完成させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> • 子どもたちといっしょに、例題のパズルを完成させる。 <p>〈T 2〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 子どもたちがやり方を理解しているか、一人ひとりの反応と様子を見る。 <p>〈T 2〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • 3～4人のグループを作って、席を指定する。 <p>〈T 1・T 2〉</p> <ul style="list-style-type: none"> • パズルピースを配る。 • パズルピースを操作して様々な具体物に見立て組み合わせる中で、ピースが正方形からできていることや、組み合わせ方によっていろいろな形になることに気づくようにする。

4. パズルの冊子と進度表を受け取り、パズルに取り組む。

- パズルが完成したら指導者の確認後、進度表にシールを貼り、冊子をめくって次のページのパズルに進む。

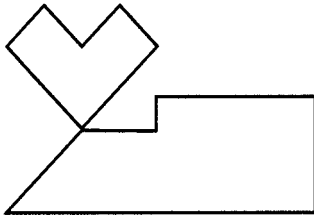


1 あお・★



9 ★・★

- 後半は全部のピースを使って台紙にある形を完成させる。



13 ★・★・★ (ぜんぶ)

4. 片付けをする。

- ゲームの用具を所定の場所に片付ける。

5. 終わりのあいさつをする。

〈T 1・T 2〉

- 指定された色のピースを台紙にあてはめながら残る形に着目し、どの色のピースを使えばよいか判断できるよう考えさせる。
- 全てのピースを使うのではないので、形をよく見て使うピースを選び、工夫して完成させるようにする。
- 完成した子は挙手させ、確認していく。
- ピースを混ぜてしまうなどやり方の理解が不十分で滞っている子がいないか様子を掌握する。
- どうしても完成できない時はいくつかのピースを固定するなど個別に指導・助言を与える。

- 全てのピースが入るよう推理して形を組み合わせるようにする。

〈T 1・T 2〉

- 片付けの手順を指示する。
- 片付けが速やかに行えるよう対応する。

- 本時のまとめをし、終わりのあいさつをする。

9. 評価

- ① パズルに興味を持って考えることを楽しんでいたか。
- ② 形をよく見て使うピースを選び、工夫して完成させることができたか。

以上の観点から、一人ひとりの取り組みと反応を指導者間で話し合い、評価していく。

造形あそび指導案

9：15～10：00 於：つき組保育室

指導者 磯 沼 美 紀
神 山 祐 希

1. 年 齢：5 歳児（つき・やま組）
2. あそび設定の視点：一人ひとりの創造力を引き出す造形あそび
3. 主 題：木工づくりに挑戦～ビー玉転がしゲームを作ろう～
4. 主題について

丸・四角などいろいろな形の木片を板の上に並べながら、ビー玉の通る道を考える。スタートからゴールまでの間にどのようなゲーム性を考え作ることができるか、子どもたちがそれぞれの発想を膨らましていけるような活動になればこの教材を考えてみた。

5. 園児の様子

日常の遊びの中でも自分の発想を形にしてあそぶことが好きな子どもたち。空き箱工作も好きだが、ブロックや積み木（カプラ）など形を組み合わせながらいろいろなものを作っていくのを楽しむ姿がよく見られる。

今回は、木片から子ども達がどのようなスタートからゴールまでの中に、どのような工夫をしビー玉転がしゲームを作っていくか、できる限り創造力を引き出せる活動にしていきたい。

6. 本時のねらい

- ・木片をいろいろ組み合わせながらビー玉の通る道を工夫して考えていく。
- ・個々にルールを考えながらゲームを完成させていく。

7. 本時の指導過程

*最初に2つ（造形あそび・知能あそび）の活動内容を子どもたちに説明して選択させる。

時間：9：10～9：15 場所：ホール

教材の内容及び園児の活動	指導上の留意点
<ol style="list-style-type: none"> 1. 始まりの挨拶をする。 2. 本時の内容の説明を聞く。 3. 材料を配る。 <ul style="list-style-type: none"> ・板 ・木片 ・木工ボンド 4. ①スタートとゴールを決め、それ以外のところを木片で囲いを作っていく、ビー玉が落ちないようにする。 	<p>T 1：これからの活動に期待を持てるように説明していく</p> <p>T 1 T 2：ビー玉がうまく動くか確認しながら勧めていけるよう、個々に声をかけていく。</p>

<p>②板に木片を試行錯誤しながら並べ、ビー玉の通る道を考えていく。</p> <p>5. ボンドで木片と板を貼り合わせていく。</p> <p>6. できあがったゲーム盤にビー玉を転がしていき、手で板を動かしながらゲームを試してみる。</p> <p>7. 更に木片を足したり、マジックを使い仕上げていく。</p> <p>8. 片付けをする。</p> <p>9. 鑑賞する。</p> <p>10. 挨拶をする。</p>	<p>T 1 T 2：ボンドの使い方を指導する</p> <p>T 1 T 2：工夫した点を認めてあげたり、さらに工夫できそうな点をアドバイスをする。</p> <p>T 1 T 2：友だちの工夫に気づけるような声かけをする。</p> <p>T 1：本時のまとめをして次回に期待を持てるようにする。</p>
---	---

8. 評価

- ゲーム性のあるものができたか
 - 造形活動をたのしむことができたか。
- *これらの点を指導者間で確認し、評価していく。

小学校の部

国語科学習指導案

9:20～10:20 於：くろしお組教室

指導者 川口涼子

1. クラス：くろしお組 (1年生)

男子22名 女子12名 計34名 聖徳式(個人) 平均IQ 142.2

2. 教材：音感語～擬音語・擬態語～(用具言語)

3. 授業設定の視点：音感語を通し、創造的知能の育成をする

4. 目標：2音のくりかえしのことばのイメージを言語化する。

5. 教材設定の理由

(1) 教材観・指導観

きらきらひかる おそらのほしよ

私たちは星のきらめきに「きらきら」という音を聞いている。いや、聞いているのではない。なぜなら星のきらめきに音などはないのだから。では、聞いているのではないとしたら私たちはそれをどこでとらえているのだろうか。そのことばをとらえているのが耳ではないとしたら・・・それは体の一部ではなくもはや私たち自身にそのようなことばをとらえることが出来る感覚・感性を持っているといってもいいのではないか。「きらきら」ということばに音を聞いているのではなく、そのことばがもつイメージをとらえることが私たちにはできるのであろう。これこそ私たちが持つ豊かな言語感覚といえるのではないだろうか。

本校ではこのような立場から擬態語・擬声語とよばれることばを『音感語』とよんでいる。わたしたちは「きらきら」を概念としてとらえているのはなく、その音にイメージを結び付けているのだろう。また、逆にある対象から、例えばここでいうところの「星」というその物自体から「きらきら」という音感語を思い浮かべることができるともいえる。

これまで児童はこの授業の中でまず絵と音声の照合を行った。渦を巻いている様子を「ぐるぐる」、坂道を石が転がっていく様子を「くるくる」というふうな。また次に行動と音声の照合を行った。例えば歩く様子を「すたすた」「とことこ」「よろよろ」といったふうな。そしてその音感語が違えば、歩く様子も変わってくる、ということを感じて持っていること、そしてその感性の確認を行った。その感性・言語感覚を児童はこれまでの成長過程において獲得してきた。だがそれには個人差が大きい。今回はこれまでの発展的教材と位置付けている。絵や行動だけではなく、児童が接する対象を広げ、その対象からどのようなイメージを受け取り言語化していくかを問いたい。その感性・感覚をここで改めて問うことで、すでに獲得している児童にはさらなる研磨を、今獲得している過程にある児童には刺激を与えていくことがこの教材の目的であると考えている。

(2) 児童観

この4月に入学した子どもたちである。これまで異なる環境の中で成長してきた子どもたちがひ

とつの教室に集まりみんなで同じことを考えていくことによりやく慣れてきたところである。語彙量に関してもこれまでの言語活動には個人差があり、それを授業や日頃の学校生活の中でお互いに刺激し合い今後ますます成長していくのである。今回扱う『音感語』に関しては5月に視覚と音感語の照合・行動と音感語の照合を行った。これらはその音感語とその現象との組み合わせを新しく知識として身に付けるのではなく、児童がもともと持っている感覚を意識させていく作業であった。今回はその言語感覚をさらに磨いていくことを目標としていきたい。

また、本校では教科学習のなかでも児童の知能を刺激している。この授業ではさまざまな対象からよりそれに合ったものを導くという考え方を利用しなければならないので集中思考を利用することになるだろう。また逆に、対象からいろいろな音感語を考えていくという観点からいえば同時に拡散思考も利用していくことになる。どちらも児童の知能をさらに伸ばしていく手助けになると考えている。

【知能構造のプロフィールークラス平均一】

知能指数	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
142.2	148.8	138.8	139.1	138.5	149.4	141.7	138.2	143.5

6. 指導計画

- ①音感語を使い、視覚と音声の照合を行う。…………… 1・2校時
- ②音感語を使い、行動と音声の照合を行う。…………… 3・4校時
- ③音感語を使い、イメージを言語化させる。…………… 5校時 (本時)

7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導上の留意点
○授業の構えを作る	<ul style="list-style-type: none"> ●授業開始のあいさつをする。 ●素読 (お誓い三か条・第一輯) 	○姿勢・気持ちを整える
○前時の復習	<ul style="list-style-type: none"> ●『たべもの』(中江俊夫)を読む 音感語を思い出す 	○音声とイメージが理解できているか確認する
○音感語の照合	<ul style="list-style-type: none"> ○『きまりことば』(阪田寛夫)の空欄部分(音感語部分)に当てはまる音感語カードを選ぶ。 ○音感語カードと下の言葉とのイメージが合っているか確認する。 	○音感語と行動などとの感覚が共通のものにできているか。

<p>○イメージの言語化</p>	<p>○元の詩とは違う音感語を入れて『くろしお版 きまりことば』を作る。</p> <p>○どこにどのような音感語を入れたらよいか考える。</p>	
<p>○まとめ・学習内容の共通化</p>	<p>○違う音感語を入れたことによって元の詩とのイメージの違いを話し合う</p> <p>●授業終了のあいさつをする</p>	<p>○学習内容の確認と共に、自己評価も促す。</p>

8. 評価

対象に対するイメージをどれだけ言語化できたか。

数学科学習指導案

9:20 ~ 10:20 於: はやぶさ組教室

指導者 米 持 勇
渡 邊 孝 典

1. クラス名: はやぶさ組 (1 年生)

男子 21 名 女子 12 名 計 33 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 143.0

2. 授業設定の視点: 創造的知能の開発を目指した学習指導

3. 授業の題目: 不等号を利用したゲーム

4. 題目について

本校の児童は発展的な課題を好み自力で粘り強く考えていこうとする姿勢が強い。一年生から 90 分の授業を取り入れているが、十分な時間を与えて考えさせていくことで子どもたちのやる気や粘り強さを育てていくことにもつながっていく。本校では、一年生の 6 月に「等号・不等号」の指導を行っている。不等号の指導としてはかなり早い時期に取り扱うわけだが、不等号の学習によって、数の大小関係をとらえたり、数量関係を等号・不等号を用いた式で表わすことができ、等式についての理解がいっそう深められる。本時の内容は「不等号を利用したゲーム」である。楽しくゲームを進める中で、等号・不等号を自由に使いこなし、これを使った式を自在に組み立てることができるようにしていきたい。また、ゲームの中で、さまざまな可能性を考えて創意工夫することで「拡散思考」の因子を、できた等式・不等式が正しいかどうか判断することで「評価」の因子を、それぞれ刺激することができる。

5. クラスの実態

4 月に入学してからの約 2 ヶ月間、授業への構えや学習態度の確立に重きを置きつつ、数・たし算・ひき算といった学習内容の理解、定着を図ってきた。授業への構えや学習態度の確立は、まだ十分とは言えないが、児童は毎授業、一生懸命考え、課題に対して粘り強く取り組むことができている。また、多くの児童が、数学に対して興味・関心を持っており、意欲的に取り組んでいる。本時は、ゲームを通して学習を深める内容となっており、普段通り積極的で楽しみながら、力を発揮していくことが予想される。児童によっては、ルールを理解するために時間を要することがあるが、二人指導制を活かして個々に対応し、全ての児童がゲームを楽しく学習内容を深めていくことができるようにする。

尚、本クラスの IQ (知能指数) と FQ (知能因子指数) は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
143.0	150.2	138.0	140.8	136.4	156.1	139.1	138.5	144.9

6. 指導計画

等号、不等号の意味…………… 8 校時

等号・不等号の活用…………… 4 校時（本時は2校時目）

等号・不等号のまとめ…………… 2 校時

7. 本時のねらい

等号・不等号を利用したゲームを通して、等式・不等式に関する理解を深め、創意工夫し拡散的な思考を育てる。

8. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点及び留意点
(1) 等号・不等号の意味や使い方を理解させる。	(1) 等号・不等号の意味や使い方を復習する。	(1) 授業の導入として、いくつかの問題について一斉に考えながら振り返りを行えるようにする。
(2) 練習課題で、等式・不等式の理解を深めさせる。	(2) いくつかの課題に取り組みながら、等号・不等号の使い方を確認するとともに、等式・不等式の理解を深める。	(2) 個々の進度の違いに注意をしながら、個別に対応していく。
(3) ゲームの方法とルールを理解させる。	(3) 説明をしっかりと聞き、わからない点を質問する。	(3) できるだけわかりやすく短時間で説明する。どうしてもルールがわからない児童に対してなど、場合によって、個別に対応する。
(4) ゲームを楽しみながら、等式・不等式に関する習熟をはかる。	(4) ルールを守ってゲームを行う。 条件1から条件4まで、条件を順次変え、難易度を上げながらゲーム行っていく。	(4) 全員がルールを守って楽しくゲームに参加しているかに気を配る。 条件にあうように数字を入れ替えることが適切にできていない児童には、様子を見ながら、ヒントを与えたりしていく。

《ゲームのルール》

- ① 二人一組となり対戦する。
- ② 0から10までの数字カードを2セット、計22枚用意し、条件に必要な枚数だけ最初に配る（条件1、2は一人4枚、条件3、4は一人6枚）。残りのカードは、場の中央に山札として伏せた状態で置いておく。
- ③ 最初の順番の人は、条件に合うようにカードをそろえるため、山札から1枚取る。条件に合うように、カードの組み合わせや置き場所を考え、不要なカードを1枚場に捨てる。

- ④ 次の順番の人は、直前に場に捨てられたカードを選ぶか、山札から1枚取ることができる。同様に、条件に合うように、カードの組み合わせや置き場所を考え、不要なカードは場に捨てる。
- ⑤ ④を繰り返す。
- ⑥ 山札がなくなったら、場に捨てられたカードをよくきって、山札とする。
- ⑦ 早く、条件に合うように数字カードをそろえることができた人が勝ちとなる。

条件

1: $\square - \square = \square + \square$

2: $\square - \square > \square + \square$

3: $\square - \square + \square < \square + \square - \square$

4: $\square - \square < \square + \square < \square - \square$

尚、ゲーム中は、条件カードに数字カードをのせながら考えていくようにする。またその様子は、常に相手に見えるようにしておく。こうすることにより、相手の必要なカードを予想したり、自分が必要とするカードが山札の中にあるかを知ることができる。

国語科学習指導案

9:20～10:20 於：はまかぜ組教室

指導者 渡 辺 泰 介

1. クラス名：はまかぜ組 (2年生)

男子 23 名 女子 12 名 計 35 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 139.6

2. 授業設定の視点：一人ひとりの個性 (興味・関心) に応じた学習指導

3. 教 材：『なぞなぞ詩を作ろう』

4. 目 標：なぞなぞの仕組みを使って詩を作る

5. 教材設定の理由

(1) 教材観・指導観

本校では「なぞなぞ」を思考の教材として2年生で扱う。なぞなぞは子どもたちにとって身近な言葉遊びのひとつであるが、その歴史は古く、平安中期の『枕草子』には、左右に分かれて謎を出す「なぞなぞあはせ」という遊戯があったことが残されている。なぞなぞが言葉遊びとして成り立つためには、普通に知識を問うクイズとは違い、答えにとんちや洒落、または韻を踏むことなどといった工夫が要求される。クラス活動ではなく国語の単元としてなぞなぞを扱うからには、ただ楽しむだけでなく、なぞなぞの仕組みに気づいていくことが肝要となる。そしてなぞなぞとクイズの違いを理解し、次には自分でなぞなぞを作ってみることにつなげていきたい。最初はおそらくクイズとなぞなぞが混同して出てくるものと思われるが、それを整理し、違いを明確にしていく過程でとんちや洒落といった言葉遊びに触れ、その仕組みや面白さを体感してほしいと考える。

さらに今回は一歩進んで、なぞなぞ詩に取り組みさせたい。なぞなぞが詩になることを知り、学んできたとんちや洒落、擬人化などを使いながら作ることで、結果としてその仕組みの一つである比喩について知ることにつなげていきたい。ここで、詩人の谷川俊太郎氏が『遊びの詩』(筑摩書房1981年)の中でなぞなぞについて書いている部分を引用したい。

形はどうあれ、なぞなぞとかことわざはことばの働きとして、詩と兄弟みたいなものなんです。連想とかたとえとか同音異義が、なぞを解くかぎになっている点ね。なぞなぞは世界中にありますね。なぞなぞをもっていない言語なんてないんじゃないかしら。(p.140)

谷川氏の言葉にあるように「詩となぞなぞは兄弟」だとすれば、なぞなぞの発展としてなぞなぞ詩に取り組むことは意味があると考えます。なぞなぞが一方の視点だとすれば、詩にすることで多方面からアプローチしていくことができるのではないだろうか。子どもたちから出てくるものが「詩」と言えるかどうかは別として、どのような工夫が見られるかに期待したい。

(2) 児童観

昨年度からの持ち上りのクラスである。挙手や発言の多さには差があるものの、どの子も授業に対しては前向きである。また、このクラスでは一年生の時から素読読本とは別に各自に「詩の

はまかせ組（2年生）

ファイル」を持たせ、こちらが選んだ詩を配布し読み合ってきた。そういう意味では、詩や言葉遊びに関する感覚は、ある程度磨かれていると見ることもできる。

本校の児童は総じてクイズやなぞなぞが好きであり、この単元についての期待も大きいと言える。友達の発言に刺激され、さらに面白いものが出てくるように促していきたい。

【知能構造のプロフィール—クラス平均—】

知能指数	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
139.6	144.8	133.1	141.1	133.2	141.8	135.8	146.7	140.7

6. 指導計画

- なぞなぞを分類する。…1・2校時
- なぞなぞを作り、クラスで評価し合う。…3・4校時
- なぞなぞ詩を作る。…5校時
- なぞなぞ詩を発表し合う…6校時（本時）

7. 本時の目標

なぞなぞの仕組みを使って作った詩を発表し、評価する。

8. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
①なぞなぞの復習	<ul style="list-style-type: none"> ●授業開始の挨拶をする。 ●素読読本第弐輯を音読する。 ○既習のなぞなぞの仕組みをを分類する。 	<ul style="list-style-type: none"> ●授業の構えをつくる。 ○分類する理由がしっかりと理解できているか。（言葉、イメージなど）
②詩人のなぞなぞ詩を紹介する。	<ul style="list-style-type: none"> ○題名をかくしたなぞなぞ詩を読み合いながら、題名を想像し、詩の中にある、なぞなぞとして成立している工夫を確認する。 	<ul style="list-style-type: none"> ○比喩や擬人化などに着目できるか。
③作ったなぞなぞ詩を発表し評価する。	<ul style="list-style-type: none"> ○作った児童に発表させ、その題名を考えさせる。それぞれの作品の工夫している点を確認する。 ●授業終了の挨拶をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ○なぞなぞの仕組みとして比喩や擬人法などがうまくつかえているか。

9. 評価

2年生が、なぞなぞの仕組みを理解しながら工夫した詩が作れるか。

数学科学習指導案

9：20～10：20 於：わかしお組教室

指導者 千葉 安弥子
谷口 優

1. クラス名：わかしお組（2年生）

男子 22名 女子 12名 計 34名 聖徳式（個人）平均 IQ141.5

2. 授業設定の視点：一人ひとりの能力に応じ、柔軟な思考を育てる学習指導

3. 授業の題目：「かけ算パズル」

4. 題目について

本校では1年生から4年生までを知能開発期として捉え、知能教育を行なっている。この知能教育は知能訓練やゲーム・工作の教科だけでなく、すべての教科において取り組んでいる。様々な知能因子を刺激し、指数を伸ばすための工夫がなされており、数学の授業においても同様である。教師が子どもたちに教えこむのではなく、自分たちで考えて解答を導き出せるように指導を続けてきた。また、基本的な知識や技能の習得だけでなく、習った事項を柔軟に活用させていくことに力を入れている。

今回は「かけ算パズル」に取り組む。簡単な数字をうまく組み合わせ、1年生で学習したたし算・かけ算と2年生で学習した混合算を利用し、併せてパズルのルールに沿って『12』を作りだしていく。さまざまなパターンのパズルを解いていく中で、試行錯誤していくこととなる。パズルを通して、計算の工夫といった技能面と合わせ、創意工夫していく力も養っていきたい。

5. クラスの実態

本クラスは、どの子も学習に対する意欲があり、日々の授業を楽しんで取り組むことができている。持ち上がりのクラスなので、教師と子ども、また子ども同士もお互いをよく分かりあっている。授業には一人ひとりの児童が自分なりの考えを持って参加し、友達の意見もしっかり聞き、それに対しての自分の考えを述べたりノートに記録することも上手になってきている。授業中は多くの意見が出され、活発な話し合いがなされる。考える力や集中力には多少差があるものの、友達の意見を聞くことで理解を深めていくこともでき、興味を持って課題に取り組むことができている。

今回のパズルでもルールを理解するのに時間を要する児童がいることも考えられるが、その場合には、二人指導制を活かして個々に対応していききたい。全ての児童がパズルのルールをしっかりと理解した上で楽しみながら解き、達成感を味わわせていきたい。

尚、本クラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
141.5	149.1	137.6	137.6	140.1	151.9	137.8	136.9	141.0

6. 指導計画 (1時間扱い)

「かけ算パズル」……1時間 (本時)

7. 本時のねらい

パズルのルールを正確に理解し、試行錯誤しながら考え、工夫していくことができる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点									
<p>1 答えが10になる式を考えさせる。</p> <p>2 『かけ算パズル』のルールを理解させる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 使える数字・回数等に制限をかけず、かけ算・足し算を用いて自由に式を考える。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin: 10px 0;"> <p style="text-align: center;">かけ算パズルのルール</p> <p>I ①～④までの数字を使って、答えが12になるようにする。</p> <p>II 正しく12が作れるよう、①、③を入れる。</p> <p>III 但し、辺で接している部分でのみ計算できる。</p> <p>IV すべてのマス目が埋まらなくても良い。</p> <p>(例)</p> <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr> <tr><td>②</td><td>③</td><td>①</td></tr> <tr><td>8</td><td>④</td><td>4</td></tr> </table> <div style="display: inline-block; vertical-align: middle; margin-left: 20px;"> <p>式：②×④＝8</p> <p>④×①＝4</p> <p>8＋4＝12</p> </div> </div>				②	③	①	8	④	4	<ul style="list-style-type: none"> • 式を考えながら計算のルールについても確認していく。
②	③	①									
8	④	4									
<p>3 『かけ算パズル』に取り組ませる。</p> <p>4 友だちの工夫した点を知らせ、思考を広げさせる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • さまざまなパターンのパズルに取り組む。 • 紹介された友達の解答を聞き、自分の考えも広げていく。 	<ul style="list-style-type: none"> • 理解できていない児童には、個別に声をかける。 • 粘り強く考え、自分なりの工夫点を見つけられるように助言する。 									

知能訓練指導案

9：20～10：20 於：やくも組教室

指導者 臼田愛実
松尾由香

1. クラス名：あずさ・やくもA組（3年生）

男子23名 女子10名 計33名 聖徳式（個人）平均IQ 164.8

2. 授業設定の視点：柔軟な思考の開発と育成を目指した指導

3. 教材名：熟語点数置き換えゲーム

4. 本時刺激される知能因子：記号で転換を評価する（EST）

5. 本時のねらい

熟語の読み方を決められた母音の点数にしたがって点数に置き換え、より高得点をねらってゲームを行うことにより、記号で転換を評価する力を育てる。

6. 教材について

「漢字」というと、熟語として扱われる様に見ると概念的要素が強い様に感じられるが、取り上げ方によっていろいろ変わる。知能訓練の教材には幼児の段階から「漢字」をパズルで行うなど図形として扱う教材がいくつかある。未習の漢字であっても、興味や挑戦心をもって取り組む様子が見られる。

この教材ではまず、与えられた漢字の中から2つの漢字を組み合わせて熟語を思いつかせる。次に漢字の読み方を点数表に基づき、ア段-1点、イ段-2点、ウ段-3点、エ段-4点、オ段-5点、ン-0点に置き換え、合計して点数化する。たとえば、『知能（ちのう）』は $2 + 5 + 3 = 10$ 点になる。『訓練（くんれん）』は $3 + 0 + 4 + 0 = 7$ 点になる。また同じ熟語でも読み方によっては合計点に違いが出てくる。たとえば、『草原（くさはら）』だと、 $3 + 1 + 1 + 1 = 6$ 点にしかないが、『草原（そうげん）』と読むと $5 + 3 + 4 + 0 = 12$ 点になる。このように、1つの漢字の読み方を、どのように読むと何点に置き換えられるか柔軟に考え、できるだけ高得点になるように判断しながら熟語を作っていく事が目的になる。

今回は思考を深めさせる方法として、ゲームの形式をとる事にした。このクラスにおいては、ゲームでいかに高得点をとるかという目的意識を持たせ、友達とかけひきする緊張感の中で高得点になる様に比較判断する事が、評価力を養う上で効果的であると考えからである。

ゲームでは、漢字を組み合わせて2文字の熟語を作っていく。まず、自分の手札をよく見てどのような熟語が作れるか考える。同時に点数に置き換えながら、どのように組み合わせると点数に置き換えると高得点につながるかを臨機応変に考えながら、適切に札を交換していく事が必要となる。

このようにいろいろな思考を重ね合わせて、高得点をとれる札の集め方を工夫して考えていくことで、『柔軟な思考の開発と育成』につながっていく。

この教材を通して、漢字学習への興味の幅を広げたり、また、ものごとを多角的に見て的確に判断していく姿勢が育つきっかけになる事を期待している。

7. クラスの実態と指導の観点

本校の知能訓練では、3年生より能力別クラス編成を行っており、本クラスも年度初めに編成された。課題にはどの子も前向きに取り組み、自分のペースで考えていく姿勢が見られる。友達同士の関係も良く、協調性を持って関わることができている。その一方で、負けないように上を目指して競い合ったり、自分自身の限界に挑戦していこうという姿勢はまだあまり感じられない面もある。

本クラスの児童のIQとFQ（知能因子指数）の平均は、以下の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散	集中	評価
164.8	177.0	157.0	160.3	164.8	164.2	163.6	177.5	153.9

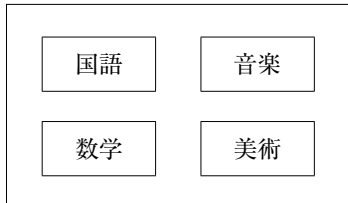
本時に刺激する記号の領域における本クラスの平均FQ（知能因子指数）は157.0で昨年度からの伸び数は+11.3である。はたらきにおける評価の平均FQは153.9で昨年度からの伸び数は+0.9であり、クラスとしては上昇傾向にあるが、指数としてはどちらも最も低い因子であるといえる。だからこそ、このクラスの児童が大好きなゲーム形式の課題を通して、持っている知識を活かしながら、より高得点を目指していこうという気持ちを育て、転換力、評価力を伸ばすきっかけになることを期待している。

授業においては、導入を具体的でわかりやすくしていきながら課題内容の把握を確実にして、ゲームにじっくりと取り組めるよう時間配分を適切に行う。また、二人指導制を活かして個々の取り組みの様子をよく見て、集中して思考できるよう環境設定をしていく。

3年生になり、漢字への興味、熟語の知識もさらに向上している。漢字という興味・関心のある素材を用いることにより、挑戦意欲を刺激して積極的な姿勢と活気ある授業になることを期待する。

8. 本時の指導過程

教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
1. 挨拶・出席確認 2. 導入 ●一斉で、いくつかの熟語を黒板に提示し、どの熟語が一番強いかを考える。 (1)「いちばん強いのはどれでしょう。」 ●4つのカードのうち、点数にすると一番強いのはどれか考える。	●本日の健康状態も把握する。 ●身近にある熟語を点数化することで、興味を引き、点数化していることを気づかせる。 ●T1：全体へ指導を行う。 T2：児童の様子を観察し、必要に応じて声がけをしていく。



- 一番強い熟語が「国語」であるのは、なぜなのかを各自考える。

こくご=13点

- 点数表を見て、点数化について理解する。

国語 (こくご) $5 + 3 + 5 = 13$

数学 (すうがく) $\square + \square + \square + \square = ?$

音楽 (おんがく) $\square + \square + \square + \square = ?$

美術 (びじゅつ) $\square + \square + \square + \square = ?$

点数表	
ア段…1点	エ段…4点
イ段…2点	オ段…5点
ウ段…3点	ン…0点

- (2) 「なんて読むかな？」 牧场

3. 展開

- (1) 模擬カードによるシミュレーションを見て、ゲームの進め方、得点の付け方を理解する。

《熟語点数置き換えゲーム》

◇用意するもの

カード1組（30枚）、個別記録用紙、
グループ用記録用紙
個別熟語カード用シート

◇人数 3人

◇勝敗の付け方

各自、できた熟語を記録用紙に記入し、一番得点の高い人が勝ちとなる。

- 「国語が一番強い」と示し、なぜそうなるのか気づかせていく。反応を見ながら、適宜ヒントを出していく。

- 点数表を提示し、いくつかの熟語を点数化し、理解させる。

- T1：全体へ指導を行う。

T2：よく理解できていない児童には適宜助言を与えていく。

- 同じ漢字でも読み方によって点数が変わることに気づかせる。（「ほくじょう」と「まきば」）

- T1・T2：2人で模擬的にゲームを行い、具体的に分かりやすく説明する。

- どのように熟語を作れば、より高得点につながるのか気づかせる。

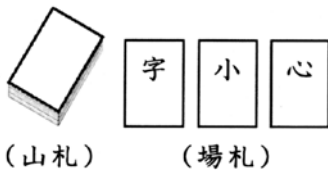
◇ルール

- ①山札から、3枚を場札として出す。
- ②順に山札から1枚めくり、場札と見比べ、有利な組み合わせで熟語作りをしていく。熟語が作れない場合は、場に置く。また、場のカードが無くなった場合は、次に山札をめくった人が場に出さなければならない。
- ③作った熟語は、各自のシートへ置いておく。
- ④山札がなくなったら終わりとする。
- ⑤各自、できた熟語を記録用紙に記入し、一番高得点になるものを選ぶ。
- ⑥グループの中で一番高得点の熟語を、グループ用記録用紙へ記入する。

《カード内容一覧》

心	語	日	体	水	台
大	男	雪	長	国	中
小	科	学	風	車	本
文	数	目	力	上	下
音	物	生	見	字	道

（スタート時）



(2) グループに分かれ、ゲームカード・得点記録用紙を受け取る。

●ゲームカード、記録用紙、シートを配布し、ゲームに取り組ませる。

T1：ゲームカードと個別シートを配布する。

T2：グループ用記録用紙と個別用記録用紙を配布する。

<ul style="list-style-type: none"> ● 1回戦目は指導者のリードでゲームを行うが、様子を見て軌道に乗ってきたら途中からグループごとに進めていく。 ● 山札がなくなり1回戦目が終わったら、各グループで2回戦目を行う。 4.まとめ ● 高得点を取れた熟語を発表する。 ● 本時の感想をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ● T1：一斉で1回戦目のゲームを進める。 T2：ゲームを理解してスムーズに行われているか観察し、適宜助言・指導する。 ● T1・2：山札がなくなったグループに、記録用紙に記入させる。 机間巡視しながら、必要に応じて助言を与えていく。 ● どんな熟語が高得点を取れたのか発表させて感想をまとめる。 ● 本時の課題のねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。
---	--

9. 評価

児童の取り組み（理解や工夫）と課題の内容を二人の指導者で分析し、実践記録としてまとめ、次の実践に活かす。

知能訓練指導案

9:20～10:20 於：あずさ組教室

指導者 浅利 絵海
豊田 奈都代

1. クラス名：あずさ・やくもB組 (3年生)

男子21名 女子11名 計32名 聖徳式 (個人) 平均IQ128.8

2. 授業設定の視点：一人ひとりの能力に応じて見通し力を引き出す二人指導

3. 教材名：線路図の完成

4. 本時刺激される知能因子：図形で見通しを集中思考する (NFI)

5. 本時のねらい

いくつかに切り離されたカードを使って、線の特徴から全体のつながり方を見通して道や線路図を完成することにより、図形で見通しを集中思考する力を育てる。

6. 教材について

幼児期の子どもが好きな遊びの1つにプラレールがある。レールには曲線や直線、方向が変えられるもの、複数のレールが合体したものなど色々な種類がある。子どもは出来るだけレールを長くつなげて、電車が絶えずぐるぐる回れるように考えたりする。この時、「ぐるぐる回る結果を予測してどのレールをつなげると良いかを推理している」ので、図形で見通しを集中思考していると言える。また、限られた広さの範囲内で、線路がつながるように考えることや、レールの本数を限定して環状の線路を考えることも、「図形で見通しを集中思考」する力が必要となる。

本時の教材は、4～16のマス目で切断したカードを用い、元通りの線路図が完成するようにカードを並べていく課題である。児童はあらかじめいくつかのマス目が指定されている台紙に、どの方向にどのカードをつないでいけば線がうまくつながるのか、見通しを立てながらカードを並べてつないでいく。ただ偶然に並べたら完成するようなものではなく、あらかじめ示された線(道)になくにはどのカードを選んだらよいかを線の特徴や曲線部分を手掛かりにして考え、少しずつ線を伸ばしていくことで全体のつながり方が見えてくる。そして、最後には一つながりの線となるように完成させていくのである。

本教材で扱う線(道)は、身近な線路図を想定した。単なる線よりも線路図であることで児童の「やりたい!」という意欲をかきたて、また「線がつながる」様子もイメージしやすくなる。問題は2×2マス、2×3マス、3×3マスまでは、手で操作しやすいカード形式、発展内容の3×4以降は切り貼り形式で行う。マス目の数が増えるごとに線の種類やつながり方で難易度があがるように作成した。あらかじめ指定されているマス目の数も、全体のマス目の数に対して手掛かりが徐々に少なくなるように意図してきめ、より見通し力を要する問題に挑戦させる。まず、2×2マスの問題で出来ることの喜びを味わい学習意欲を高め、同時に「できる!」という自信を持たせ

る。その後、段階的にピースの数を増やして2×2マスの問題に取り組んだ経験を素地として、線の種類や直線・曲線など線の特徴に着目しながら、全体のつながり方を見通して完成させていく。難易度を段階的に配列することで、学習意欲を持続させながら試行錯誤を繰り返して一つの結果を導き出すという、集中思考力を養うねらいに迫っていきたい。

7. クラスの実態と指導の観点

本校では3年次からの知能訓練の授業は能力別クラス編成である。本クラスはBクラスであるため、通常の授業においても教材の難易度や展開方法を工夫しながら指導を行っている。

今年度に入ってからの子どもの様子は、難問に対しての苦手意識から、「できないかもしれない」「難しいのはできればやりたくない」という子ども数名見受けられるが、大部分の子どもは考えることを積極的に楽しみ、挑戦する意欲を持っている。まず課題を提示すると何も説明していないのに手が上がる。いろいろな質問が出る。知りたい気持ち、やってみようとする意欲の表れとみている。

日々の授業ではまず説明をしっかりと聞き、自分の力で思考の方向性を的確に理解して進めていく姿勢を身に着けられるよう、聴く姿勢と発言のルール作りを意識して指導に当たっている。説明をしっかりと聞き、方向性を掴んで進められる子どもは一つ一つ成果を上げていることが実感できている様子で、取り組み姿勢の変化も見られてきている。

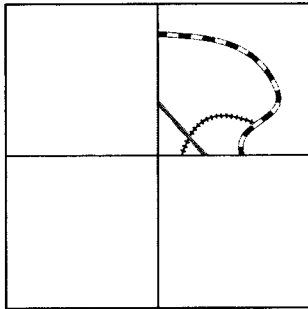
本クラスの平均IQは128.8であるが、本時刺激をする図形の因子別平均指数は134.8、集中思考の因子別平均指数は134.1であり、「図形で集中思考する課題」を得意とする子どもが多いことが予想される。とはいえ、平素の授業の様子から一斉説明後の個別対応や、難問に直面した際に助言が必要になる子どもがいることを想定できる。進め方の手順と考え方のポイントをそれぞれの子どもが理解し、それぞれの挑戦すべき課題に真剣に向かうことで達成感のある授業になるようにしていきたい。また、一人ひとりの状況に応じて適切な刺激ができるよう二人の指導者で全体と個別に目を配り、この授業が更に次へのステップになるようにしていきたい。

8. 本時の指導過程

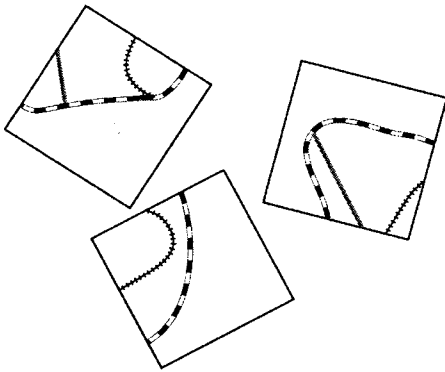
教材の内容及び学習活動	指導上の留意点
<p>1. 挨拶・出席確認</p> <p>2. 導入</p> <p>○一斉で、あらかじめ1マスだけカードが示された2×2マスの台紙に、同種の線がうまくつながるカードの並べ方を考えながら、本時の活動内容を理解する。</p>	<ul style="list-style-type: none"> • 本日の健康状態も把握する。 <p>T1：大判の導入提示（台紙とピース）を使って、具体的に進め方のポイントを説明する。</p> <p>全体の子どもの様子をつかみ、説明が行き渡るようにする。</p> <p>T2：机間巡視をしながら子どもの様子を観察し、必要に応じて個別対応をする。</p> <p>また、追加説明をした方がよい点などを押さえる。</p>

◇導入提示内容

《台紙…1マスのみあらかじめ指定》



《ピース》



○個別活動の流れを確認する。

【教材の内容】

① 台紙

※使用するピースの色が示されているので、色ごとに問題を完成させていく。

《カード操作形式》

○ 2×2マス

[1. あか 2. きみどり] 2題

○ 2×3マス

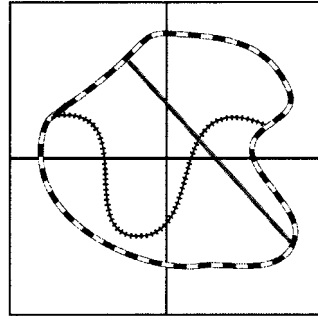
[3. うすみずいろ 4. むらさき] 2題

○ 3×3マス ※ピースは同色

[5. うすもも 6. うすもも] 2題

[7. みかん 8. みかん] 2題

《完成図》



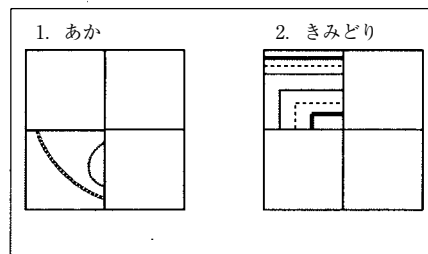
※特に以下の2点を十分理解しているかどうかに留意をする。

①台紙に使用するピースの色が示されている。

②ピースは袋の中に2題分一緒に入っているのので、台紙の色に対応させる。

《台紙例》カード操作形式

※1枚に2題の問題が示されている。



《切り貼り形式》

- 3×4マス（1題） ○ 3×5マス（1題）
- 4×4マス（2題） ○ 5×4マス（1題）

② ピース

- ※ 2×3マスまでのカード形式は2題ずつ、色違いのピースが一袋に入っている。
- ※ 但し、3×3マスからは、同色のピースになっている。
- ※ 一人分ずつ箱に入れて用意してある。

③ 進度表

- ※ できたら静かに挙手をし、確認を受けたらシールを貼って次の問題を進める。

④ 完成見本

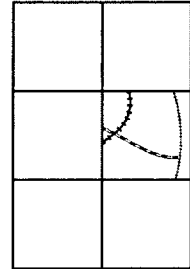
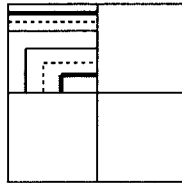
- ※ 個別に必要なときに配布する。

3. 個別の活動を行う。

- 進度表に記名後、台紙、ピースを使ってそれぞれのペースで課題に取り組む。

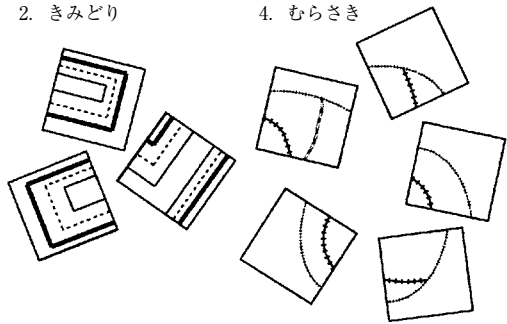
《問題例》カード操作形式

- 2. きみどり 2×2マス
- 4. むらさき 2×3マス



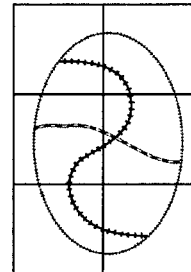
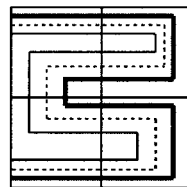
《ピース例》

- 2. きみどり
- 4. むらさき



《完成見本例》

- 2. きみどり
- 4. むらさき



- 教材を配布し、個別の活動を援助する。

T1・T2：進度表を配布し、記名を確認する。

T1・T2：台紙、ピースを手分けして配布し、スムーズに活動に取り掛かれるようにする。

<p>○ 3×3マスのカード形式の課題が全て終了した児童から、台紙とピースの入った箱を片付け、切り貼り形式で使用するプリント台紙と選択肢を受け取り、それぞれ進める。</p> <p>※選択肢を空欄部分に全て載せた段階で、指導者の確認を受け、その後糊で貼り付ける。</p> <p>4. 使用した用具を片付け、今日の授業の感想をまとめる。</p>	<p>T1・T2：個々の活動を観察し、必要に応じて確認、助言を行う。</p> <p>※個々の児童の工夫の仕方を観察する。</p> <p>※滞っている児童に関しては、段階に応じた助言を行う。</p> <p>①ピースの特徴に気づかせる。</p> <p>②3×3マスからはピースが同色なので、問題に応じたピースに気づかせるような助言を行う。</p> <p>• 3×3マスのカード形式が終了した児童には、個別に3×4マスの切り貼り形式に進めさせる。</p> <p>※糊で貼る前に指導者が確認をする。</p> <p>※時間的に貼る作業が厳しい場合は、プリント台紙に載せた段階で完成とするなど、柔軟に対応する。</p> <p>T1：片付けの手順を児童に伝える。</p> <p>T2：使用した用具を片付ける。</p> <p>T1：児童の感想を聞き、本時の課題がねらいを達成できたかどうかの判断材料とする。</p>
--	---

9. 評価

授業後、本時を振り返り、児童一人ひとりの課題への取り組みや反応（意欲・集中力・理解度）について、指導者同士で確認をし、本時のねらいが達成できたかどうか実践記録にまとめて、今後の実践に活かす。

地理科学習指導案

9：20～10：20 於：つばさ組教室

指導者 細 沼 克 吉

1. クラス名：つばさ組（4年生）

男子21名 女子11名 計32名 英研式（個人）平均IQ 168.7

2. 地形図から島の生活をイメージする

3. 主題について

本校では社会科という教科ではなく、2年生から地理の学習を行っている。この2年生で行う地理の学習は、各学期末に3～4時間掛けて行うもので、3年生から本格的に始まる地理学習の前段階をなすものである。ここでは1学期に「視点の転換」、2学期に「鳥瞰図の視点」、3学期に「空間の連続性」と、空間をさまざまに捉えていく力を養ってきている。

3年生からは2時間ずつ地理の授業が設定されており、ここでは2年生のときの学習を土台として、等高線を用いて3次元の空間を平面上に表していく方法と、逆に平面上で表された等高線から、実際の3次元的な空間をイメージしていくことに取り組んできた。しかし3年生の段階で扱う等高線は、単純化された山の形など、基礎的なものに絞って学習している。

4年生での地理学習では、地球儀の基本的な見方や平面上の地図との違いなどについて学習し、その後二万五千分の一の地形図を使って、本格的な地図の見方の学習に入る。しかし最初に扱う地形図は吉祥寺周辺の地図で、等高線が複雑に入り組んでいる地図を扱うわけではない。今回の授業では、二万五千分の一の島の地形図を、等高線を単純化した形で子ども達に示し、島の3次元的な形をとらえさせるとともに、地形図に記載されているその他の情報を読み取り、それをもとに島の人々の生活を含めた島のイメージを子ども達一人ひとりが想像力を発揮して作り上げていければと考えている。

4. クラスの実態

4月から子ども達は地球儀の見方を学習している。赤道や緯度・経度などの基本的な知識を学ぶとともに、実際に地球儀を使って国や都市探しなどを行ってきた。世界で一番大きな島は、一番小さな大陸は、一番大きな湖は、その周りにどんな国があるかなど、子ども達は地球儀を見て調べていくことに大変興味を持って取り組んでいる。また地理的な知識も豊富な児童も多く、そういった児童が積極的に発言をしてくれることで、互いの理解を深めていくことができている。

今回の学習は地球儀の学習から離れ、3年次に扱った地形図の見方を思い出しながらの学習になる。一枚の島の地図から子ども達がさまざまな発見をし、互いに意見を出し合いながら、島やそこでの人々の生活のイメージを豊かに持つ事ができればと考えている。

下記にクラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）の平均を示した表を載せておいた。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
168.7	175.6	162.8	167.8	167.9	167.6	165.1	184.2	158.8

5. 指導計画

3年次に学んだ等高線の復習……………1校時

島の地形図から島の様子をイメージする……………本時

6. 目標

地形図を読み取り、島の様子を想像していくことができる。

7. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点および留意点
(1) 二万五千分の一の地形図から、島の3次元的なイメージをつかませる。	①等高線から、島の高さや傾斜などのイメージをつかみ、断面図で表してみる。 島の縦横の距離や一周の長さなどを調べる。	等高線の特徴を読み取らせていく。
(2) その他の地形図の情報から島の様子を考えさせ、まとめていく。	①島の人口や産業などを考えていく上で必要な情報を地形図から読み取り、そこから想像できることを発表していく。 ②各自自分なりの島のイメージをまとめていく。 ③島の実際の姿についてホームページなどから得た情報を提供し、自分たちが想像したイメージと比較してみる。	島の中の建物の数や学校の数、地図記号などをもとにして、島の人口、子どもの数、学校の様子、産業など、予想できることを様々な角度から考えさせていく。



鹿児島県鹿児島郡十島村地図
国土地理院発行 1 : 25000 の地図に手を加えたもの

英語科学習指導案

9 : 20 ~ 10 : 20 於 : みずほ組教室

指導者 藤 石 勝 巳

1. クラス名 : みずほ I 組 (4 年生)

男子 12 名 女子 4 名 計 16 名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 163.9

2. 授業設定の視点

一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習

個々の子どもたちの興味・関心は様々である。また幼少から英語を練習してきた児童もいて能力差もある。同時に様々な子どもたちの興味・関心に応えるためには、単純な内容だけを取り入れていても、すぐに授業への興味は失われてしまう。そこで英語の授業では「ちょっと難しい内容」、「心地よい緊張感があるスピード」を心がけている。「簡単そうだけどちょっと頭を使わないと答えがわからない。」や「気持ちを集中していないとすぐに答えられない」と子どもたちが感じてくれればと思っている。そして英語学習の基本はしっかり聞いて、しっかり反復練習することでもある。同時に語学の学習においては特に、子どもが他の子どもから学ぶことの大切さを意識させていければと思っている。本校では 1 クラスを半分に分け、2 グループの少人数で指導している。その少人数指導を活かして一人ひとりの能力、個性に応じていきたい。

3. 授業のテーマ : “What Am I?”

(動物の特徴を表す英語表現を様々な活動を通して楽しく身につける。)

4. テーマについて

聖徳学園では英語教育を 3 年生から行なっている。3 年生では主に英語の音に慣れることを目標としている。そのため子どもたちの身近にある「教室にあるもの」、「動物」、「家の中にあるもの」、「町の中にあるもの」、「職業」、「乗り物」などの語彙を英語で紹介し、日本語にはない英語の音に慣れさせていく。また多くの英語の音を通して、体を動かしながら自然に英語のリズムやイントネーションが身につくようにしている。そして英語の文字の基本となるアルファベットの大文字、小文字を練習し、さらには文字と発音の関係を知る基礎となるフォニックスアルファベットを身につけることで、その後の英語の文字や文の読みに発展させていく。4 年生では、3 年生で身につけた基礎をもとにして、聞く英語から少しずつ自分について話す英語へと広げていく。「自分の年齢」、「住んでいる所」、「好きな食べ物、動物、スポーツ、色」、「何時に起きるか」、「どうやって学校に来るか」などの質問に答えられるように練習する。また文字についても少しずつ単語レベルの読みから文を読むレベルへと発展させていく。5 年生になると、絵本やテーマに基づいた英語学習が中心となる。そして 6 年生ではさらにテーマを広げ、「水の循環」、「太陽系」、「世界遺産」など、英語を通して環境問題などにも目を向けさせたいと思っている。

今回扱うテーマは 4 年生で学習する「What Am I?」である。今年度の 1 学期の前半は、3 年生

で学習してきた内容を膨らませ、発展させてきた。1 学期の後半は 3 年生で練習してきた動物の名前に加えて、動物の特徴を表す英語を聞いて、何の動物を表しているのか類推する力を伸ばしていく内容である。同時に子どもたちがそれらの表現を自分で上手に表すことができることも目指していければと考えている。

5. クラスの実態

4 年生はこのクラスは昨年 1 年間英語を学習し今年が 2 年目である。日常的な英語の語彙やアルファベット、フォニックスなど英語の基礎はほぼ身につけている。

小学生の耳の良さを活かし、英語の基本的なリズムや発音を自然な形で身につけてほしいと思っている。

子どもたちも毎時間目を輝かせ、今日はどんな英語が学べるのか、どんなゲームができるのか楽しみにしている。コミュニケーションで大切な「しっかり相手の話も聞く」ということにも留意しながら指導していきたい。

6. 目標

- ① 動物を英語で色や体の特徴で学ぶ。
- ② フォニックスアルファベットの f, g, h, j, k, l を身につける
- ③ 様々なゲームや活動を通して、英語の楽しさを知る。

7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
あいさつ	1 挨拶をする 2 日付等の板書をする 3 歌を歌う	<ul style="list-style-type: none"> • 文字が丁寧か • 元気に大きな声で発音されているか
フォニックスの練習	4 フォニックスアルファベットの練習をする	<ul style="list-style-type: none"> • しっかり文字と音との関係を身につけているか
動物の特徴を表現する	5 動物の色、体の部位などを練習する 6 絵本やゲームなどを通じた活動をする	<ul style="list-style-type: none"> • 正確に表現できているか • 友達の発言に耳を傾けているか
まとめ	7 あいさつ	

英語科学習指導案

9：20～10：20 於：ほくと組教室

指導者 明石 この実

1. クラス名：みずほ組（4年生）

男子10名 女子 5名 計15名 聖徳式（個人）平均IQ 163.9

2. 授業設定の視点：一人ひとりの個性や興味・関心、能力に応じた英語学習

本校では、3年生から英語学習が始まる。各ホームルームクラスを二つのグループに分け、1グループ約16人の少人数で行われる。この少人数での授業展開は、45分の授業の中で子ども一人ひとりに多くの練習・発言の機会を与えている。よりたくさん聴き、話すことが大切という教科の特性を踏まえ、何度も繰り返し聞いたり声に出したりする中で、一人一人が少しずつ自信をつけていくことが出来る。基本的には初めて英語に触れる子どもたちを対象に授業は行われていくが、中には既に英語を学んできている子も近年は少なくない。一斉授業では、その差を感じさせない工夫が必要である。活動にゲーム性を持たせたり、歌やリズムで一体感を味わわせたりすることで、初めての子には楽しみながら定着を促し、そして既習の知識がある子にも、みんなで学ぶからこそ生まれる楽しさ・ちょっとしたチャレンジ性を感じさせる事が出来る。実際子どもたちの様子を見てみると、授業で一緒に学び合うことは事前の知識に関わらず「楽しい」ということが良く伝わってくる。それぞれの子がお互いの興味・関心、能力に応じ、影響し合って力を伸ばしている。

3. 授業のテーマ：“What am I?”（私は何でしょう？）

4. テーマについて

今回のテーマ「What am I?」は、4、5月にテーマとした「About myself（自分について）」に続く二つ目の単元である。子どもたちは、3年次には「聞いて分かる」「絵を見て言える」ことを目標に「教室内にあるものや文具」「動物」「食べ物」「乗り物」などの基本単語や表現を学ぶとともに、アルファベットの太文字・小文字の名称・識別そして発音との関係を知る上で基礎となるフォニックスを練習してきた。4年次では、それらに書くこと・読むことも加え発展させていく。

「What am I?」は、3年次に学んだ「動物」を更に深めるかたちで設定されたテーマである。「身体の部位」「動く様子（形容詞）」「色」「鳴き声」などの語句の組み合わせにより、動物の特徴を捉え、何の動物のことを言っているか推測したり、表現したりを楽しむ。

文字と音との関係を知り、自分で読んだり書いたりできることに繋げるため、フォニックスに関しても、聞き取って書く段階へ発展させていく。また、単元ごとに少しずつ「対話表現」も取り入れてきた。二枚で対応するようになっている絵カードを用い、「Do you know kendama? - What is it?」「How much is it? -It's 710yen.」などの表現を学ぶ。実際に授業の中で、自然とこのような言葉が子どもたちから出てくることも多々あるのが興味深いところである。

授業は、ほぼ英語のみで行っている。知っている単語、既習の知識から、知らない部分を「推

測」していくことも実際のコミュニケーションでは大切なところと考える。英語を聞き、そこから意味を直接感覚で獲得できるような指示の出し方の工夫も考えていきたい。

5. クラスの実態

このクラスは英語の学習を始めて2年目の学年である。これまで学んだ基本的な単語や表現もよく身に付いている。「覚えた表現を使いたい」という気持ちにあふれ、大変活発に授業に取り組んでいる。また、今年度に入って始めた書くことへも興味を示し、目標や意欲を持って取り組んでいる。発言したいあまり、他の友だちの番にも耳を傾けることが難しいこともある点では声掛けが必要な時もある。授業を通して、場の切り替え方も徐々に意識させて行きたい。

6. 目 標

- ① 動物の特徴を表す表現を身につける。
- ② [f], [g], [h], [j], [k], [l] の音の入った単語を聞いて書ける。
- ③ 様々な活動を通して、英語の楽しさを知る。

7. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点および留意点
あいさつ	1 挨拶をする。 2 日付等をノートに書く。 3 歌を歌う。	<ul style="list-style-type: none"> • 丁寧に書かかれているか。 • 元気に大きな声で発音されているか。
音と文字との関係の練習	4 [f], [g], [h], [j], [k], [l] の音の入った単語を聞いて書く。	<ul style="list-style-type: none"> • 音を確認しながら、正確にかけているか。
動物の表現の練習	5 動物の表現をテキストを用いながら学ぶ。 6 ゲームなどの活動を通して身につける。	<ul style="list-style-type: none"> • 正確な発音で読めているか。 • 友達の英語にもしっかり耳を傾けているか。
まとめ	7 挨拶をする。	

数学科学習指導案

9:20～10:20 於：しらさぎ組教室

指導者 中野恵子

1. クラス名：あさぎり・しらさぎA組 (5年生)

男子23名 女子9名 計32名 聖徳式(個人) 平均IQ 181.7

2. 授業設定の視点：一人ひとりの能力に応じて規則性を発見する学習指導

3. 題目：『ハノイの塔』

4. 題目について

規則を見つけることが容易な数列については1年生から触れるが、本格的に数列を単元として、学習するのは、5学年である。初めに等差数列・等比数列について一般項の求め方や数列の和の求め方(等差数列のみ)を学習し、その後階差数列などの応用問題に挑戦させる。さらに次の段階では、子ども達が自ら規則性を発見し、公式化できるように指導していく。

本時は、規則性の発展として、「ハノイの塔」と呼ばれる題材で実践してみることにした。ハノイの塔とは、19世紀の数学者リュカの考案したパズルであり、塔の3本の柱A,B,Cがあり、柱Aにある何枚かの円盤を1枚ずつ柱Bを中継点にして柱Cに移動させるものである。ただし、どの柱でも上の円盤の方が小さくなるように移動させなくてはならない。また、最も少ない回数で移し替えることがポイントとなる。今回は、実際に円盤を自ら操作しながら、その枚数と移動の回数との規則性に気づき、「 n 枚の円盤があるとき、移し替えが完了するには何回移動しなければならないのか？」を考察することがねらいである。また、その理由まで考えられることも期待したい。試行錯誤を重ねなければならない課題ではあるが、その過程を楽しみつつも、「なぜ」を追求する心を持つように働きかけていきたいと考えている。

5. クラスの実態

男女合わせて32名のクラスである。一斉授業では、男女問わずに挙手が見られ、友だちの意見をしっかりと聴くことができる。一方、個別課題の時は思考速度に幅があるものの、一人ひとりがじっくりと取り組んでいる。本時で扱うパズル的な要素を含んだ課題には、大変興味を示すので、柔軟な思考を生かして規則性を発見してくれることに期待している。

本クラスのIQとFQ(知能因子指数)の平均は、以下の通りになっている。本時の授業では「図形」「記号」の領域と「拡散思考」「集中思考」の働きを刺激していく。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
181.7	188.0	179.0	178.0	182.6	186.3	177.6	185.4	176.3

6. 指導計画

規則性の発展……………1校時（本時）

7. 本時のねらい

円盤の枚数と移動の回数から規則性を発見し、その理由を考察していくことができる。

8. 本時の指導過程

ね ら い	学 習 活 動	指導の重点及び留意点												
<p>1. 黒板に提示したハノイの塔を使い円盤の動かし方についてルールを確認させる。</p> <p>2. 円盤の枚数を変化させて、順の最少回数を調べさせる。</p>	<p>個別にハノイの塔を配り、円盤の数が1枚の時と2枚の時を例に最小手順を操作し、題意を理解する。</p> <p>円盤の枚数の変化とともに、移動回数がどのように変化するかを調べる。その結果をワークシートにまとめていく。</p> <table border="1" data-bbox="491 890 821 1014"> <tr> <td>円盤の数</td> <td>1</td> <td>2</td> <td>3</td> <td>4</td> <td>…</td> </tr> <tr> <td>移動の回数</td> <td>1</td> <td>3</td> <td>7</td> <td>15</td> <td>…</td> </tr> </table>	円盤の数	1	2	3	4	…	移動の回数	1	3	7	15	…	<p>パズル形式であることを伝え、興味を持たせる。また、最少手順ということ意識させる。</p> <p>個別に声を掛けながら、粘り強く考えさせる。</p>
円盤の数	1	2	3	4	…									
移動の回数	1	3	7	15	…									
<p>3. 最少回数を発表させてその手順を確認させる。</p>	<p>黒板に提示したハノイの塔を使いながら、最少手順を発表する。また、動かし方のコツも発表させる。</p>	<p>友だちの考え方をしっかりと聞くようにさせる。</p> <p>円盤の数と移動の回数の表を板書する。</p>												
<p>4. 円盤の数が5枚の時の移動の回数を考えさせる。</p>	<p>表から気がつくことをまとめる。</p>	<p>1枚、枚数が増えた時の回数の変化に気づかせ、「前の回数×2+1」か「2のn乗-1」に目が向けられるようにする。</p>												
<p>5. 規則性について考えさせる。</p>	<p>規則性の式の意味を考え、発表する。</p>	<p>ハノイの塔に興味を持てるように具体的な話をする。</p>												

数学科学習指導案

9:20～10:20 於：あさぎり組教室

指導者 松崎昭彦

1. クラス名：あさぎり・しらさぎB組 (5年生)

男子12名 女子18名 計30名 聖徳式(個人) 平均IQ 158.1

2. 授業設定の視点：一人ひとりの能力に応じて論理的思考を深める学習指導

3. 授業の題目：モンティ・ホール問題

4. 題目について

モンティ・ホール問題とは、アメリカのゲームショー番組の中で行われたゲームに関する論争に由来する、確率論の問題である。ゲームのルールは次のとおりである。

「プレイヤーの前に3つのドアがあって、1つのドアの後ろには景品の新車が、2つのドアの後ろにはヤギ(はずれを意味する)がいる。プレイヤーは新車のドアを当てると新車がもらえる。プレイヤーが1つのドアを選択した後、司会者が残りのドアのうちヤギがいるドアを開けてヤギを見せる。ここでプレイヤーは最初に選んだドアを、残っている開けられていないドアに変更しても良いと言われる。プレイヤーはドアを変更すべきだろうか?」

残っているドアのどちらかに新車が隠れているので、当たる確率は2分の1ずつ、つまり選んだドアを変更しても変更しなくても確率は変わらない、と直感的には感じられる。事実、「変えた方が当たる確率は2倍になる」という解答に対して、著名な数学者も含めて多くの反対意見が寄せられ、新聞紙上で論争になったことから「モンティ・ホール問題」とか「モンティ・ホール・ジレンマ」と呼ばれている。

本校では、6年生の2学期に「確率」の指導を行うので、本クラスの子どもたちはまだ「確率」について学んではいない。今回の授業では、「どちらの場合が当たりやすいか」という言葉で考えていく。確率の細かな定義は知らなくても、直感で選び、実際に試行を繰り返しながら、この問題の解決方法について考えていくことは可能であると考ええる。

5. クラスの実態

5年生に進級してからの約2ヶ月間、授業への構えや学習態度の確立に重きを置きつつ、分数の乗除・文字式・数列といった学習内容の理解、定着を図ってきた。授業への構えや学習態度の面では、子どもたちは毎授業、一生懸命考え、課題に対して粘り強く取り組むことができている。理解の速さや計算の正確さには個人差があるが、「地道にコツコツ、丁寧に」を合言葉に、一つ一つの課題に対してしっかり考えていこうとする姿勢は全員に共通している。

本時は、子どもたちにとっては初めて投げかけられる教材であるが、ゲーム的な要素も強いので、興味をもって取り組んでくれるものと期待している。

なお、本クラスのIQ（知能指数）とFQ（知能因子指数）は下記の通りである。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
158.1	165.2	150.5	158.9	163.6	164.1	152.8	168.0	147.2

6. 指導計画（1時間扱い）

モンティ・ホール問題……………1時間（本時）

7. 本時のねらい

モンティ・ホール問題について、替えたほうが当たりやすくなることが理解できる。

8. 本時の指導過程

ねらい	学習活動	指導の重点及び留意点
(1) モンティ・ホール問題のルールを理解させる。	<p>3個のカップを伏せて置く。どれか一つに当たりを入れておく。相手に一つ選ばせた後、残っているうちのハズレを開いてみせる。相手に「残っているカップに替えても良い」と告げる。替えたほうが当たりやすいかどうか。</p>	
(2) 替えたほうが良いかどうか考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> モンティ・ホール問題のルールを理解させる。 替えたほうが良いかどうかを考え、自分の意見を発表する。 友達の意見を聞き、話し合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 教員は当たりのカップを知っていることを確認する。 選択肢は「替えたほうが良い」「替えないほうが良い」「どちらも同じ」の3つ。 理由についての意見が出ない場合は、周りの友だちと相談させる。
(3) 実際に行い、割合を計算させる。	<ul style="list-style-type: none"> 2人一組で、自分の選んだ方法で実験を続ける。 	<ul style="list-style-type: none"> 各組が60回ずつ行う。 3つのグループごとに合計する。
(4) なぜ替えたほうが良いのか考えさせる。	<ul style="list-style-type: none"> 替えたほうが良い理由を考え、発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 期待される意見 「表であきらかにする」「カップの数を増やす」「替えた場合は当たりはずれが必ず逆転する」など

歴史科学習指導案

9：20～10：20 於：あさま組

指導者 板橋 裕之

1. クラス名：あさま組（6年生）

男子25名 女子10名 計35名 聖徳式（個人）平均IQ 175.6

2. 授業設定の視点：

「士農工商」に象徴的に示される厳しい身分制度の下、農民や町人はその生活の隅々にまで統制がなされつつも、現代社会にも引き継がれている様々な文化も生み出し逞しく生きるその姿を追い理解する。

3. 主 題：日本通史「江戸時代における農民と町人の生活」

4. 主 題について：

本校においては、3年生の段階から「歴史」という教科が設定され、6年生までの4年間にわたり授業が行われる。それは、本校児童に求められている学習能力が、系統的、体系的に組み立てられた授業によって、もっとも効果的に発揮され高められるからである。

ここでいう歴史科における学習能力とは、単に高校で、または中学で学習すべき内容を簡略化した概略的なものを理解できればよいといったものではない。なぜならば、そうした枠内の学習では、単に知識を身につけるといった学習に子ども達をとどめさせ、人物名を知り漢字で書けるとか、年号と事件名を結びつけ、精々その歴史的事象の概略を説明できる、といった程度の学習で終えてしまうからである。もちろんそうした知識も必要ではあるが、歴史を学ぶ中で身につけるべき事は、「歴史は人類が創りあげてきたものであり、これからの歴史を創り上げるのもやはり自分たち一人一人を含めた全ての人類であること」をリアルに理解することである。それは、大きく捉えるならば、過去の様々な人々の行動を知ることを通して「人間とは何か」「社会の発展とは何か」「社会はどう発展していくべきか」といった自らを見つめ、未来を見つめる目を養うことでもあるといえる。

6年生に焦点を当て具体的に見ていくなれば、授業の視点は以下のような四つの学習能力に分類し設定されている。

6年次における四つの学習能力とその内容

資料活用能力

問題意識にあった資料を探し、問題解決の手段として使うことが出来る

創造的思考力

学習目標に結びつく課題を自分で見つけて学習を発展することが出来る

論理的思考力

できごとの因果関係を考えながら、問題解決に迫ることが出来る

客観的思考力

歴史上の人物の一生を現代社会とは違う時間差を押さえた生活として考えることが出来る

そこでの指導のねらいは、各時代の特徴をつかむことを中心にした日本歴史の全体像をつかむことであり、それを歴史上の人物の働きを通して把握させることである。そのためには、想像力と歴史的概念形成といった能力が求められると私たちは考えている。それは、3・4年生での「昔話」、4・5年生での「人物伝」といった授業の中で養われ、人物の物の見方・考え方を見る視点が養われてくるのである。

今回主題として設定されている「江戸時代における農民と町人の生活」では、特定の人物を扱うことはしないが、当然そうした視点で授業が展開されることになる。

子ども達は、江戸時代の百姓といえば、常識的なイメージとして「武士階級から厳しい統制の下、年貢を取り立てられぎりぎりの生活を強いられている」といった支配され抑圧される人々のイメージが先行しがちではないかと考える。事実、江戸時代に確立した幕藩体制の幕府と藩の財政は、農民の納める年貢によってその大部分が支えられているのであり、「百姓は財の余らぬように、不足なきように治ること道なり」といった考えや「百姓とごまの油はしばればしぼるほど出るものだ」といった考えからも裏付けられているといえる。農民の生活の隅々まで定められた「慶安の御触書」は、そうした幕府の考えに基づいて出されたものであるといえる。

また、町人の生活を見るならば、町人は、町奉行―町役人―町人―地借・店借・奉公人といった縦の関係によって支配されており、江戸の町においては大半が武家屋敷であり、わずか五分の一度の場所に江戸の人口の半分をしめる町人がひしめき合い住まわざるを得ない状況にあった。表通りに立ち並ぶ大店がある一方、町の裏通りでは棟割り長屋が軒を連ね、ほん数坪の家と便所も井戸も共有して生活するといった実態は、テレビ等でも子ども達が目にするところである。

しかし、はたして農民や裏通りに住む町民は、支配され抑圧されるだけの存在であったであろうか。毎日、日が昇り始めてから沈むまで働き通しの農民も盆や暮れには仕事を休み、もちをついたり米を食い酒を飲んだのである。また、現在にも結びつく「村歌舞伎」「人形浄瑠璃」「祭り」「花火」などといった文化がそこに存在もしたのである。更には、農民の知恵と創造力は遅しく、次々と新しく能率的な農具が発明され肥料の改良も行われ、労力の軽減や生産の向上に結びついていったのである。

そうした実態に気づき、単に支配され抑圧される存在だけではなかったといったことに気づかせたい。

5. クラスの実態：

本校の児童の一つの特徴は、興味・関心の高さであり、興味あるものを徹底的に追求しようとする姿勢と能力といえる。それは歴史においてとりわけ顕著に表れており、教科書や参考書ではほとんど扱わない内容にまで興味を広げ調べることが出来る児童が必ずクラスに何人か存在する。先日も「建武の新政」の単元において「楠木 正成」について触れたところ、「赤坂城の戦いでは……」と詳しく語りだした児童もいたのはそのあらわれであるといえる。また、二つ目の特徴として、クラスの中において心を開放し自由に楽しげに授業に参加し、思った事、感じたことをありのままに語ることが出来る児童が多くいる事である。しかし、残念ながら、この数年を見ると高学年になるにつれそうした傾向が影を潜めはじめ、知識偏重といった傾向やともかく静かにノートを取っていればそれで授業は成立していると考えられる児童が目立ってきていた。そうした中において、今年度担当したこのクラスの児童はといえば、これまで聖徳らしさとして指摘されていた特徴がよく現れている児童が多く、単に知識を詰め込むというよりも時空を飛び越えその世界の中に入り込み楽しむことが出来ているように感じられる。

今回の授業では、歴史的背景を押さえつつ、そこに息づく農民、町人の姿を想像し自らをそこに自分を置き換え理解することが出来るのではと期待もしている。

なお、本教材のねらいと知能構造との関係でいうならば、考える「領域」では概念が、考える「はたらき」としては集中思考と評価といったことが関連してくると考えるが、数値的にも十分な力を持っている児童といえる。

知能構造のプロフィールークラス平均ー

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
175.6	186.4	165.8	174.4	176.3	183.7	167.2	183.7	166.9

6. 目 標：

江戸時代における身分制度の実態を理解すると共に、支配されている側の人間である農民や町人の生活ぶり、とりわけ統制の中においても息づくその暮らしぶりを理解する。

7. 指導計画：3時間扱い

1. 江戸時代における身分制度
2. 統制の中においても息づく農民や町人の暮らしぶり（本時 1/2）

8. 本時のねらい：

統制の中においても息づく農民や町人の暮らしぶりを理解する。

9. 本時の授業展開：

ねらい	児童の学習内容	指導の重点と留意点
1. 自分自身が描いた農民の生活ぶりを確認すると共に他の人が描く農民の生活を比較し、そのイメージを共有する。	前時に書いた農民の「一日の生活」日記や場面絵を発表し比較・検討する。	本時のねらいに結びつけられるように、前もって発表作品を分類しておく。
2. 厳しい統制の中でクラス農民とは相反する農民の存在を知り理解する。	「川ばたの九介」「世間見聞録」などの資料を活用しそこに描かれる農民の姿を理解する。	苦しむ農民だけではない農民がいたこと、つまりイメージの転換を図れるようにする。
3. 農民が生んだ文化を理解する。	村芝居、人形浄瑠璃、祭りなどの資料をもとに、心豊かに暮らす農民の姿を追う。	絵を資料として提示し、それが何を意味しているのかを考えさせる。 <ul style="list-style-type: none"> • 農民の心豊かな生活 • 現代にも結びつく文化
4. 町人の年中行事を下に、その生活ぶりと共に結びつく文化があることを理解する。	村人が開発した農機具をもとにそれがどんなことに使われ、従来とどう異なるかを考える。	左記の学習活動を通し、農民の知恵の豊かさに気づくようにする。
まとめ	年中行事の一覧表に書かれている行事を現代と結びつけ当時の生活をイメージする。	現代に結びついていることを理解させる。
	はじめに抱いていた農民や町人の生活とは異なる生活が存在していたことを今一度確認する。同時に現代ともつながっていることもあらためて確認する。	

理科学習指導案

9:20～10:20 於理科実験室

指導者 三輪 広明

1. クラス名：ほくと組 (6年生)

男子 23名 女子 10名 計 33名 聖徳式 (個人) 平均 IQ 170.5

2. 授業設定の視点：創造的知能を発揮して、表面張力の要因を探る学習指導

3. 授業の題目：表面張力

4. 題目について

表面張力とは、2つの異なる物質が接している面で見られる分子同士の引っ張る力のことである。物質の内部では、分子が均等に存在するため、互いの分子の引き合う力がはたらく、それぞれの分子を取り巻くように分子が存在するようになる。ところが、外側では、液体分子が存在しないこととなる。このため、他の分子で囲まれている分子の数を、出来るだけ少なくしようとする。それには、液体の表面をできるだけ小さくすればよい。これが表面の張力となって現れる。

子ども達の日常生活でも表面張力と呼んで説明する現象が身近にある。コップに満たした水が、コップの縁よりも高くなる現象はその一例である。水の表面に見られる張力が、はたらくことによって、水よりも比重の高いものが浮いてしまうことも興味を引く現象と考えられる。ここでは、その表面張力の強さがどのようなことと関係して、強くなったり、弱くなったりするのか、探究していく。また、昨年度に引き続き、子ども達の意欲を喚起するために、実験方法を考えさせる活動の場として設定した。

これまでも、子ども達が実験の方法を自ら考えることは様々な場面で行ってきた。たとえば、5年次の、植物の発芽の条件の実験、6年次では、混合物から純粋な食塩を取り出す実験などが挙げられる。これらの実験は、班ごとに実験方法を考えさせ行なった。いずれの場合も、子ども達の意欲は高くなり、時にはこちらの予想できなかった実験を試みることもあった。また、昨年度の毛細管現象の探求においてその成果が感じられた。

本題目では、「表面張力」を題材とし、子ども達自身が実験方法を計画する授業を設定した。ここでは、表面張力が強くなったり、弱くなったりする要因としてどのようなことが考えられるのか予想する。そして、そのことを検証するために、どのような実験をすればよいのか考えさせる。要因として、水の状態を変えることがまず考えられる。ものを溶かしてみたり、温度を変えてみたり、また、水ではないものを使って見たりする。また入れ物の形状、大きさ、深さ等も要因として考えられる。これらは、知識として押さえない内容ではなく、探究していく活動そのものを学習の目標と定めた。この探究活動こそ創造的知能を活用するよい学習の場であると考えからである。

5. クラスの実態

6年生になり、学習への意識が高くなった人が多い。今までの自分からの脱皮と言うことを感じている人もいる。また、小学校生活最後の時期を意識してのこともある。実験をするということになると、広く、関心は高まってくる。自ら調べてみたいという意欲がとても高いものがある。話し合いの中では、身近な体験から考え深めていこうとする人も多く、話し合いは、活発に進められている。素朴な疑問や、独自の視点から考えを述べることも彼らの良い面と感じるところである。こうした点がいい形で授業の中で出てきている。授業の中でのこうした発言を通し、問題解決のための糸口を様々な観点から考え出す面が彼らの特質である。

なお、本クラスの平均IQとFQは以下のとおりである。他の因子と比べ、集中思考力が高い点がクラスの特徴として表れている。本題材の学習で発揮されることが期待できる。

IQ	図形	記号	概念	認知	記憶	拡散思考	集中思考	評価
170.5	181.8	161.2	168.4	169.5	179.2	161.7	178.9	162.9

6. 指導計画

- (1) 表面張力を利用し、水に針金を浮かべる。……………1校時
- (2) 実験の計画を立て、実験を行い、予想したことを検証する。……2校時（本時2校時目）

7. 本時のねらい

各班で計画した実験を行い、表面張力の要因がどのようなことであるのか検証する。

8. 本時の指導過程

ねらい	児童の学習内容	指導の重点と留意点
1. 課題の把握	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 課題1 どのような液体の時に表面張力が強くなるのか。 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○班ごとで立てた実験の計画を確認する。 ○班ごとで役割を決め実験を進める。 ○実験の結果から、表面張力を強くする要因であったのかどうか考える。 ○結果の意味を考えさせる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●こども達の調べたい要因をどう実験として組み立てていけるか。 ●界面活性剤が表面張力を弱くすることを知っている児童もいるとが考えられるので、強くする方法で考えさせる。 ●班の全員が実験に関われたか。 ●安全に心を配りながら実験を進めることができたか。 ●ガラス器具の破損への対応。

2. 結果の発表	課題2 どのような液体の時に表面張力が強くなるのか。	●表面張力を強くする要因となるのかからないのか選別していくという点から実験の意義を捉えさせる。
3. 学習のまとめ		●学習を通し、わかったこと、疑問に思ったことをまとめさせる。

全 体 会

10：30～11：40 於：講 堂

1. あ い さ つ

園長・校長 加賀 光悦

2. 園児・児童発表

5 歳児 歌 唱

4 年生 合 奏 唱

3. 研 究 発 表

「創造性を育むロボット教育

～特別研究数学の実践から～」

教頭・数学特別研究担当 和田 知之

平成26年度の研究活動計画

研究部の活動計画

研究テーマ「英才児の創造的知能の開発と育成」

恩田彰先生は創造性を「新しい価値あるもの、またはアイデアを作り出す能力すなわち創造力、およびそれを基礎付ける人格特性すなわち創造的人格」と定義している。つまり、創造性は創造力と創造的人格の総合概念であるということになる。

創造過程という観点から見た場合、この新しさとは、社会的価値基準に照らしたものではなく、個人にとって価値ある新しさという基準が立てられるというのである。これを、自己実現の創造性と言い換えることも出来るわけで、学校教育では特に重視されることになる。即ち、創造活動では独創性が尊重されるから、個性の開発と育成が基本となってくる。これは私たちにとって、創造性を考える際のもっとも基本的視座になるものと思う。

また創造性は、創造的思考、創造的技能および創造的態度の三つの側面からとらえることができるという。この面から見た時に私たちには多くの蓄積があるわけであり、特に知能教育が積み上げてきた成果は言うまでもないことである。

私たちはこれまで、次のような研究課題を挙げて取り組んできている。

- (1) 各教科における創造性教育の実践例の整理 — その因子と方法（技能）—
- (2) 各教科における創造性教育の可能性を探ることと、因子の特定
- (3) 子どもたちの成長と、創造性の相互関連を明らかにすること
- (4) 英才児の創造的思考の実態の抽出
- (5) 子どもの、イマジネーションの問題として捉える方法

これらについては、平成9年度夏期研修合宿の場で、園田元校長より「創造的知能をどのような内容と方法で開発育成するか」の研究の指針として、以下①～④の提案があり、それ以来各場面で、実践・研究を繰り返し行っている。

- ① 知能訓練（知能あそび）による創造的知能の育成と開発
- ② 教科の指導による創造的知能の育成と開発
- ③ 学級活動・委員会・クラブ・自由研究・学校（園）行事等の特別活動による創造的知能の育成と開発
- ④ 個性・創造性を認める環境作り

— お互いを認め合う雰囲気・横並びや同質思考に捉われない価値観等 —

(4)の具体的取り組みについては、10年以上前までに遡って、過去の実践研究・授業研究・公開研究発表会・自由研究・特別研究などの中から、英才児の創造性に関わる研究を洗い出している。また、定期テストの成績検討会議に全教員が、特色ある児童の実態を報告する資料『英才児を探るⅡ』も、これまでに形態を変えながら積み重ねてきている。昨年度、新たに「英才児を探る」委員会が新設されたことにより、『聖徳学園における“英才児像”』を集約する体制が整ったので、より内容を明確にしてまとめていきたい。

(5)の具体的取り組みについては、次のa.～d.がある。

- a. 各教科の年間指導計画の中に創造性との関わりを捜していく。
- b. 教科毎に研究テーマを設定し、教科の責任において研究を推進する。
- c. 英才教育の指針を定める基盤を作りつつ進むために、各個人がテーマを決め実践する。
- d. 本校ならではの、教材・授業展開・2人指導制などに重点を置いた授業研究。

知能教育研究部の活動計画

本校では昭和44年から小学校における知能教育の実践研究に取り組んでいる。「知能教育」というのは、文部科学省の学習指導要領の内容にもなく、むしろ教科書もない。従って、教育内容（カリキュラム）から教材・教具まで全て独自に作り上げていかなければならない。

そこで、我が国の知能教育の先覚者伏見猛弥先生の指導を仰ぎ、アメリカのギルフォード教授の知能構造理論に基づき、実践を重ね、知能教育の基礎を築き上げてきた。現在は、2歳児から小学4年生までを対象にして、一貫した教育内容と方法で、「幅の広い思考力の育成」と「創造性豊かな人間性の育成」をめざした研究活動に取り組んでいる。

1. 目標及び活動内容

(1) 知能因子の分析と教材開発

知能教育の教材・教具は全て手作りのため、週一回の定例の研究会では日々新たな教材開発を中心に行っている。教材作成においては、次の点に留意して研究を深めている。

- ① 授業のねらい（知能因子）を十分に押さえる。
- ② 子どもの発達段階（興味・知識・思考）を考慮する。
- ③ 単なる子どもの興味だけに流されないで、教育的価値を十分に考慮する。
- ④ 一人ひとりの子どもの能力に十分対応できるように（能力の限界への挑戦）、内容に幅をもたせ、発展性のあるものにする。
- ⑤ 学習の流れに変化をもたせるようにする。
- ⑥ 個別指導について十分に配慮する。

(2) 指導技術の向上

知能教育というのは、知識を教えるのではなく考える力を育てるわけであり、必然的に教科の学習指導法とは異なる点が多くなる。そこで毎時間の実践記録を基に、次の点をポイントにして授業研究を深め、指導技術の向上を図っている。

- ① 一人ひとりの子どもの能力と個性に応じた指導を行う。
- ② 意欲・集中力を育てる。
- ③ 教えるのではなく、考えさせることに重点を置く。
- ④ 思考過程を大切にす。〔「できた・できない」の結果だけにこだわらない。〕

(3) 実践結果の分析と資料作り

2. 今年度の活動の重点

- (1) 二人指導などの聖徳の特色を活かした指導方法の研究を深め、指導技術の充実を図る。
- (2) 『聖徳式知能検査法』の実施結果を分析し、充実を図る。
- (3) 個性と能力に応じた指導の充実。
- (4) 授業での実践を通しての研究を継続的にまとめ、次の教材開発や授業に活かす。

国語科研究部の活動計画

1. 目標

- (1) 言葉に先行する精神発達の最前線における児童の成長の課題と児童を接触させることにより、その精神発達を促そうというのが私たちの基本的考え方である。
- (2) そのためには、英才児に特有の思考・感情および意識の発達の実態を捉え、その基礎資料に基づいた教材の開発、授業方法の研究がなくてはならない。

2. 研究課題

成長の課題を授業として取り上げるためにはこれに適した素材がなくてはならない。したがって、検定教科書をそのまま使用せず、幅広くさまざまな文章を集め教材としている。私たちには成長課題の特定と教材の選定が何よりも重要なことである。

そこで、人間の意識活動を大きく、感情・思考・構えの三つに分け、これに用具言語を加えた四本の柱によって私たちの国語の学習領域は構成されている。用具言語は言語作業的な領域を含み、主に練習によって習得するものである。言語作法・文法事項・漢字を含む語彙などである。

感情の領域は、感情であるから喜怒哀楽をということだけでなく、子どもたちの感情発達の階梯を見届ける姿勢をとっている。例えば、「ごんぎつね」はひとりぼっちを、「しろいぼうし」は現実・非現実を考えるための材料となる。この場合授業はひとりぼっちをめぐるの、子どもたち一人ひとりの課題・問題点を整理する場となる。思考は感情とともに人間の精神活動の重要な一部である。人間の思考路線を、児童の中に追究する姿勢をとり、一人ひとりの思考の内容・方法・段階に接近している。構えとは、身構え・気構え・心構えなどという感覚構造を示す言葉で、母国語の習得を考えるとき、なくてはならない視点であると考えている。われわれは、生まれたときから、人間らしい対象の定め方を習得し、その対象と人間の交わりにおける人間限定のあり方を構えと呼んでいる。

3. 今年度の重点目標

① 児童の成長の実態と教材の系統性の追究

イマジネーションがもたらす創造性の開発と育成、3～4年生の成長の節目に対応した教材の開発、高学年における思考教材の開発などの課題について研究を進めている。

② 卒業論文指導の充実

論文のテーマである「私と言葉」は、ことばを私という主体者との関わりで論ずること、つまり「私と私」「私と他者」「私と社会」「私と自然」「私と歴史」との関わりをことばを媒介にして見つめることにそのねらいがあり、だからこそ、子どもたち一人ひとりが自分と向き合えるようにすることが大切といえる。書きながら考える、書くことによって考える、そうすることによってまだ明確にしていなかった問題点をつかんでいく、このような姿勢を子どもたちが獲得していくためにも、そこに至るための学習の充実を更に促していく必要がある。

③ 素読

輪講の実践からその可能性を追究する。

数学科研究部の活動計画

事象を数理的にとらえ、論理的に考え、統合的、発展的に考察し処理する能力と態度を育成することを目標としている。具体的な学習活動については、以下の通り。

- ：数量・図形などに関する、基礎的な知識の習得や基礎的な概念・原理・技能の理解・習熟を図り、的確に活用して数学的な処理・考えを生み出す能力を養う。
- ：数学的な用語や記号を用いることの意義について理解を深め、数量・図形の性質や関係を簡潔・明確に表現し、思考をする能力と態度を養う。
- ：事象の考察に際して適切な見通しを持ち、論理的に思考する能力を伸ばすと共に、目的に応じて結果を検証し処理する態度を養う。
- ：体系的に組み立てていく数学の考えを理解させ、その意義と方法を気付かせる。

1. 今年度活動のねらい

- (1) 児童が挑戦するなかで、能力を高められる授業及び教材の研究と充実。
- (2) 学年（クラス）間の相互連絡を密にして、系統的な学習指導の徹底を図る。
- (3) 各単元と知能因子の関係について探り、個々の創造性を生かした授業形態を追究する。

2. 今年度の活動の重点

- (1) 基礎学力の充実及び能力の限界に挑戦させるべく、個々の児童に応じた指導と教材研究を行う。
- (2) 一人ひとりの子どもの個性と能力差に応じたきめ細かい指導を行うため、二人指導制を更に充実させていく。
- (3) 毎月1回実践報告会を開き、各学年及びクラスごとの指導状況・反応・反省を出し合い、本校の数学教育の特徴をより明確に実践していくためのカリキュラム・テキスト教材・指導方法の再検討と熟成を図っていく。更に、プリント・ゲーム類もそれぞれのクラスの実態に応じて工夫し利用していく。
- (4) 授業研究の充実を図るために、校内授業研究や教科内での授業研究を行っていく。
- (5) 個性を伸ばすという本校の教育目標、また数学への興味付けという観点から、「算数オリンピック大会」など外部の催しにも積極的に参加する。
- (6) 各指導者が数学の指導に関する自主研究テーマを設定し、年間を通じてその研究に取り組む。また、その成果を互いに発表し検討を行うことにより、力量を高め合う。
- (7) 聖徳の特色ある数学教育を推進していく。

英語科研究部の活動計画

1. 活動のねらい

- (1) 前年度を振り返り、カリキュラムの精選・吟味を行う。
- (2) 子どもの活動を中心とした授業、教材に留意する。
- (3) 少人数での授業形態を活かし、一人ひとりの個性に合わせた指導に努める。
- (4) 授業形態にあわせた「評価方法」に留意する。
- (5) 異文化に触れる機会、教材の設定に留意する。
- (6) コミュニケーション能力育成のため、スピーチ活動に重点を置く。
- (7) インターネット等を使った国際交流を実践する。
- (8) 外国人教員とともに指導内容・方法・評価について研究する。

2. 方法

毎週行われている教科会の中で検討していく。

各教員がお互いの授業を研究し、英語科での共通の課題を見つけ取り組んでいく。

また、外部の様々な研修会等に参加し研鑽を積む。

3. 今年度の活動の重点

- (1) 子どもたちの興味関心や発達段階に応じたカリキュラムになるよう、今まで実践してきたテーマや指導内容についてもう一度検討、吟味していく。
- (2) 絵本を中心に、話の内容を楽しみながら、英語の単語や表現をできるだけ自然な形で身につけられるように指導していく。そのための絵本や教材の研究に力を入れていく。
- (3) 教員から一方的な知識を与える講義式の授業に陥らないように、ゲームやその他様々な活動を通して子ども主体の授業になるよう心がける。
また、小学生は音声面で優れているので、歌やナーサリーライム・ジャズチャンツなどを通して、この時期にしか身につけられない英語の音に慣れさせる。
- (4) 指導内容の検討だけでなく、その内容をどう教えていくかという指導方法について、教科内でお互いに提案し実践する。
- (5) 小学校での英語教育の評価方法を考えるとき、ペーパーテストだけでは測れないものが多い。面接試験を行うことで、子どものスピーキングやリスニングの力を知ることができる。その面接試験のあり方についてさらに研究、工夫する。また英語学習の集大成としてスピーチに取り組ませる。
- (6) 本校での英語教育が現在中学校で行われている英語教育の先取り教育にならないように、小学校での英語教育の目標を再検討する。子どもたちが国際的視野を持った大人になるためには、どのような学習が必要なのか（特に小学校段階においては）を検討する。
- (7) 現在のカリキュラムに基づいた授業だけでなく、定期的に世界のいろいろな国の人たちと接する機会を持てるような企画を立てる。また、希望者には英検などにチャレンジさせ、児童の英語学習の励みとなるようにする。

理科学研究部の活動計画

1. 目 標

- (1) 各クラスに応じた授業を工夫し、児童の能力の限界に挑戦させ、学力を保障する学習指導の推進を行う。
- (2) 各学年の発達段階に応じた授業を工夫し2年生から6年生までの系統的な学習指導を目指す。
- (3) 飼育活動や観察会・見学会などの企画を通して、児童の科学や自然に対する興味・関心の向上をはかる。

2. 今年度の重点項目

- (1) 英才児の知能を活かした授業の実践
英才児の創造的思考を引き出すための各学年の指導方法・内容を開発し、その実践を積み重ねる。
- (2) 日常生活に密着した理科の指導
身近な生活の中の疑問や自然と触れ合う実体験を大切にした指導の具体化をさらに進め、実践の中からよりよいものを目指していく。
- (3) 自然観察会の充実
〈位置付け〉 ①自然と直接触れる場 ②授業への興味付けの場 ③授業の発展の場
今年度の主な活動内容（予定）は、以下の通り。
 - a. 植物の観察（3年生対象） ◇川原の草花の観察・スケッチ …… 10月18日（2学期）
 - b. 動物の観察（5・6年生対象）◇野鳥の生態の観察 …… 2月予定（3学期）
 - c. 星の観望会（5・6年生対象）◇月・惑星の観望 …… 1月23日（3学期）
 - d. 石の仲間集め（aと同時開催）◇石の色・粒子などの違い …… 10月18日（2学期）
 - e. 川の上流域の観察（4年生対象）◇川原の石の観察 …… 5月17日（1学期）
- (4) 特別授業の企画・実施
○ SSISS (Scientists Supporting Innovation of School Science) NPO 法人科学技術振興のための教育改革支援計画の特別授業を実施 …… 特別研究理科対象
- (5) 気象観測活動の充実・地震に関する掲示の充実
東日本大震災をきっかけに、気象観測委員会の活動の一環として、日常的な地震の観測活動に取り組んでいる。

3. 継続的に取り組んでいる項目

- (1) 実験技能の向上と安全確保を目指した指導方法の開発。
- (2) 施設を利用した校外授業の充実。
 - 2年生『恐竜』 ◇国立科学博物館の見学 …… 9月18日（2学期）
 - 5年生『星』 ◇プラネタリウムの見学 …… 12月（2学期）
- (3) 飼育活動（水槽・温室）栽培活動（花壇等）に関する研究。本年度設置した、温室を活用した学習活動の充実。
- (4) 自然のたより 2年生を対象に、身近な自然の観察記録をとり、週に一度、冊子にして配布。さらに発展的に植物画コンクールへの出品。

地理科研究部の活動計画

1. 目標

- ① 「空間的な広がり」をつかませるために、さまざまな角度から地理的事象を眺め、思考させる。(2～4年)
- ② 人間関係を理解する上において、自然環境を広い視野からとらえ、人間生活との関係、地域相互の関係を考察し、処理する能力と態度を育成する。(4～5年)

2. 指導方針

- ① 鳥瞰図的視点を獲得し、空間の連続性を意識しながら、地図を豊かなイメージでとらえていく能力を養う。
- ② 地図・統計の取扱いについての知識・技能を獲得し、それらを使いこなせる能力と態度を養う。
- ③ 地図・統計の中から、目的に応じて適切な資料を選択し、信頼性・妥当性を検証した上で、判断の基準の中に組み入れていく能力と態度を養う。
- ④ 諸外国の文化に対する理解を深め、国際社会における日本の役割を考え、国家および世界の一員としての自覚を深める態度を養う。
- ⑤ 日本の国土の保全及び地球規模での環境問題について考える態度を養う。

3. 今年度の研究課題と教育活動

① 指導内容と教材の精選化

英才児の地図学習のあり方について、研究を深めていく。

5年生の産業の学習において、4年生までの学習をより有効に活用するための教材・授業形態を工夫していく。その際、日本と世界のつながりという点も重点の一つとしていく。

特別研究に関して、特に3学期の世界的な視野での問題解決のためのアプローチについて、さらに充実させていく。

② 学校行事と結びつけた効果的な学習の内容と方法の研究

林間学校・修学旅行などと、地図学習・自然地理・地誌学習との効果的な融合のさせ方について検討していく。また秋の校外授業については、5年生の工場見学などを計画する。

③ 巡検（対象：5年生以上の希望者）の充実

身近な地域での地図の読図など、子ども達の主体的な取り組みを中心にして、毎年行っている。今年度は11月1日を予定している。

④ 作品および教材掲示の充実

スペースを最大限活用しながら、児童の作品や立体地図模型と説明文などを中心に、掲示が学習の意欲付けとなるよう心がける。

歴史科研究部の活動計画

歴史科では、4年生から3年間を通じて、歴史認識に必要なさまざまな思考力を育成することを目標としています。ただ単に知識を蓄積していくのではなく、頭の中に思い浮かべるイメージを大切に、そこから展開される歴史叙述をもっとも重視します。

歴史学習の第1段階は、「想像力の育成」です。過去の出来事という追体験のできないことを、子ども達が思考や体験の中に持っているものの中から、イメージとして再構築することに授業の重点を置いています。具体的には、歴史学習の導入期として物語を通して楽しく達成できるように工夫しています（昔話・人物伝学習）。

次の段階として、「立場や視点を転換してとらえる思考の育成」に重点が置かれます。その時代の人間になったつもりでものを考え、歴史事象を異なった視点から対比する思考の働きです。

こういった指導は、現代的な発想や一面的な思いこみに偏らない柔軟な思考を可能にさせます。5年生での人物伝学習で、吉田松陰と井伊直弼といった対極的な立場にある人物を扱うのは、このような理由からです。

そして最終段階として、「自分なりの課題を見つけ、資料に基づいた論理的な思考」ができるようにめざしています。ここで言う「論理的思考」とは、物事の原因・結果・影響が相互に関連しながら流れていくことを認識させることです。

こういった思考を学習の中で表現するとき、概念があいまいなままに知識を並べていくのではなく、人間が主人公となって自分なりの仮説や歴史叙述ができるように、一人ひとりの特性にあった働きかけを大切に考えています。

[今年度の重点課題]

1. 「学園のあゆみ」における授業深化をめざす

「建学の精神」を子ども達に伝える…… 私学においては大変重要な課題です。歴史の授業では、卒業を前に人物伝として「学園のあゆみ」を取り上げてきましたが、さらなる教材研究によって、各学年の段階を追った学習をめざしています。

2. フィールド学習の充実

昨年度は戦国時代・八王子城跡を歩き、450年前の北条氏と豊臣方の壮絶な戦いを想像し子ども達は夢中になりました。今年度は戦争遺跡でもある調布飛行場周辺を歩き、土曜休みを利用したフィールドワークの特別授業を実施します。

3. 発表力の育成

グループで調べ学習を行い発表する、という旧来のものから一歩進めて、子どもなりに発表方法を工夫させ、歴史的な出来事を寸劇やコントで発表したり、テーマクイズにしたりという指導にも力を入れています。

4. 東日本大震災を子ども達にどう伝えるか

未曾有の被害をもたらした東日本大震災を、歴史的な災害というだけではなく、復興に向けての国民の動きも含め現在進行形の歴史としてとらえさせたいと思います。

体育科研究部の活動計画

聖徳学園では、児童の発達に応じた指導を行い、子ども達一人ひとりの能力を最大限に発揮できるようにしています。そこで、体育科では、次のことについて指導の重点を置いています。

1・2年生については「遊び」を中心として、子ども達が体育に対して興味を示し、楽しく学習出きるような教材づくりに重点を置いて指導しています。また、3・4年生では「ゲーム」を中心としてルールを守りながら、集団スポーツの楽しさを教えていきます。5・6年生になると今まで学習してきた内容に更に技術的な内容を加えて、基礎を中心に指導しています。

この時期に技術的な内容を学習することで、高学年での発展へと結びつけていきます。特に高学年になると授業での工夫が必要になり、『できるようになるためには』どうすればよいのか？など子ども達が考えられるようにさせることが大切です。

○ 聖徳学園として独自性を出した体育科としてのカリキュラムづくり

子ども達の発達段階を十分把握して、教材の工夫などを中心に、子ども達の意欲づけになるような授業方法を目指しています。子どもにとって、わかりやすく、身につけやすい内容にしていきたいと思います。

体育科行事計画

聖徳の体育行事は以下の3つを行っています。

〈運動会〉 10月上旬

毎年、幼稚園と小学校と合同で運動会を行っています。内容については、体育科で検討し、できるだけ新鮮な内容を目指しています。特に児童一人ひとりが活躍できるように取り組みや役割を工夫して場を多く持たせています。

〈マラソン大会〉 10月上旬

マラソン大会に向けて、体育科では練習計画を設定し、実施しています。特に安全面に重点を置き、子ども達が粘り強く能力を発揮できることを心がけています。距離については、次の通りです。

距離：1～3年＝2km、4～6年＝4km

〈スキー学校〉 2月中旬

3～5年を対象にして、毎年、3泊4日間のスキー学校を開校しています。場所は長野県北志賀高原にある竜王スキー場で実施しています。自然の冬の厳しさや楽しさを感じながら、高学年は技術の向上、低学年は楽しさを学びながら、スキーに慣れさせていきます。子ども達の様子を見てみると、小学校時代に3回は行けることになり、かなり滑れるようになります。

〈その他〉

この他には、11月23日(祝)に東初協の私立小学校との交流として行われる体育発表会にも積極的に参加しています。

音楽科研究部の活動計画

聖徳学園では「一人ひとりの子どもの個性を育てる」「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」「豊かな感性と自立心を育てる」の3つを教育目標として掲げています

音楽科ではこの目標のために、音楽への興味関心を持ち、高め、音楽経験をいかして生活を明るく潤いのあるものにする態度と習慣の育成に努めています。また、音楽の基礎的な表現能力を発達段階に応じて育み、音楽表現の楽しさ、喜びを味わえるように留意しています。

日常の授業に加えて、秋の聖徳祭ではクラス活動を主体とする一面もあわせながら、音楽発表を中心とした表現活動を取り入れ、低学年では歌唱と鍵盤ハーモニカの演奏、中学年では歌唱とリコーダーの演奏、高学年では合唱と合奏に取り組んでいます。

「一人ひとりの個性」を尊重しながら、集団でひとつの楽曲に取り組み、創り上げるという活動は、「知能を伸ばし、創造性豊かな人間性を育てる」ことにもつながり、さらには「豊かな感性と自立心を育てる」ことにもつながっています。

心技体のバランスのとれた子どもの成長のために、現代において音楽という教科の持つ今日的意味・意義は、他の教科と同様に重要と考えられます。

1 目標、及び活動内容

- ① 様々な音楽活動を通して刺激を与え、感性を育て、バランスよく基礎的な能力が身に着くよう工夫する。
- ② 歌唱、器楽、鑑賞、創作の4領域が持つ多面性を授業の中で効果的に生かし、それが6年間を通じて体系的に作用するよう考慮し研究する。

2 今年度の活動の重点

- ① 1年～6年までの年間指導内容の精選、及び行事等での活用について。
- ② 一斉指導における児童一人ひとりへの「確かな技術指導法」、及び新学習指導要領にもとづく「評価方法」の研究。(継続)
- ③ 学校行事（公開研究発表会、聖徳祭、児童朝礼等）における各学年に適した内容の研究。
- ④ 外部講師、演奏家等を招いての「特別授業」の実施。（4年生と5年生）
- ⑤ 東初協音楽部会主催 音楽祭「さあ はじめよう」への参加
今年度は11月30日（日）人見記念講堂 4年つばさ・みずほ組
- ⑥ ホームルームでの「音楽活動」の支援に関しては、これまで同様にCDを作成、教室配備していく。また、クラス活動において活用できるようにフロア毎にキーボードを設置する。
- ⑦ 入学式、卒業式等における児童の合奏、合唱による行事への参加。
- ⑧ 特別研究では研究や創作、調べ学習を中心とした活動を、器楽クラブでは行事における演奏やサポートを中心とした活動に留意していく。

美術科研究部の活動計画

1. 目的

- (1) 各学年の発達段階に応じた課題やテーマを設定し、のびやかな感受性と豊かな創造力が獲得できるように教材を工夫していく。
- (2) 個々の児童の個性が作品に反映し、よりの確な表現で仕上げたいけるように個別指導を確立していく。

2. 今年度の重点項目

- (1) 個性と能力に応じた、効果的な指導を工夫、開発していく。
- (2) 美術に対して興味を湧くような教材及び指導方法を追究していく。
- (3) 落ち着いた雰囲気の中で、児童が表現に取り組めるように、授業の展開を工夫していく。
- (4) 仕上げた作品に対して、自己評価の時間を確保していく。
- (5) 校内の作品展示に接することにより、児童の美術に対する関心や興味が向上し、鑑賞の能力が養われるようにする。

3. 研究課題

- (1) カリキュラムについて
絵画表現、彫刻表現、デザイン、工作の関連性とバランスの配慮及び一貫性を持たせたテーマの展開方法を開発していく。
- (2) 各学年・クラスの実態に見合ったテーマや教材を開発していく。
- (3) 学内展示の充実。児童の作品だけでなく、古今東西の美術作品も鑑賞ができるように展示方法を改善していく。
- (4) 東京私立小学校児童作品展への参加については、本校児童の特色が表せるテーマを追求していく。

家庭科研究部の活動計画

小学校の家庭科においては、実践的・体験的な活動や問題解決的な学習を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけることや、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にする心情を育むこと、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と態度を育てることをねらいとしています。

本校では、5・6年生の子ども達の発達段階と生活状況を踏まえ、一人ひとりの実態に留意しながら、様々な活動に取り組んでいます。その活動に取り組む中で、特に裁縫などの実習では子ども達一人ひとりの豊かな創造力を発揮できるよう、個々が工夫できる面を数多く作り、個々の創造性に沿った指導を心がけています。

1. 目標

- ① 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知る。
- ② 家族の一員としての自覚を持った生活を実感する。
- ③ 自分の成長を理解し、家庭生活を大切にする心情を育む。

2. 今年度の活動方針および重点

- ① 一人ひとりの児童が意欲的に取り組み、自分の家庭生活をより充実したものにできる力を育てる。
- ② 生活を工夫する楽しさや物を作る喜びを知るために、出来る限り実技の時間を保障していく。
- ③ 基本的な技術は指導するが、工夫できる面は大いに個々の考えを尊重していく。
- ④ 『個』だけでなく、自分と共に生活する家族にも目を向け、『家族』という集団の大切さを意識させる。

研究発表会の歩み

研究発表会の歩み

□ 第1回 (1969年)

主 題：学校における英才教育

記念講演 「学校における英才教育」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「国語教育について」	玉川大学 教授	上 原 輝 男
「数学教育について」	早稲田大学 教授	岩 崎 馨
「知能訓練について」	英才教育研究所	清 水 驍

□ 第2回 (1970年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「英才教育5年間の経過と問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「英研式知能検査法について」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第3回 (1971年)

主 題：学校における英才教育

○記念講演 「学校における英才教育の問題点」	英才教育研究所長	伏 見 猛 彌
○研究発表 「知能と学力との接点」	英才教育研究所 指 導 部 長	清 水 驍
「知能検査の問題点」	英才教育研究所員	千 葉 晃

□ 第4回 (1972年)

主 題：小学校における知能教育

○記念講演 「小学生の知能とその教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
○研究発表 「知能診断と教育評価の関連」	英才教育研究所 研 究 部 長	千 葉 晃
○研究発表 「教科の教育と知能教育との接点」	本校教務主任	園 田 達 彦
○研究発表 「知能教育のための教材」	本校教諭	小 林 五 郎
	本校教諭	郡 司 英 幸
	本校教諭	成 田 幸 夫

□ 第5回 (1973年)

主 題：知能と学力

○記念講演 「本校における教育」	英才教育研究所 所 長 代 行	清 水 驍
------------------	--------------------	-------

○研究発表 「知能と学力との接点(1)」 — 知能指数と学業成績を中心にして —

本校教務主任 園田達彦

「本校における漢字指導」 本校教諭 小林五郎

□ 第6回 (1974年)

主 題：英才教育の追究 — 6年間の実践と問題点 —

○研究発表 — 各教科の実践をもとにして —

「数学科教材に対する児童の取り組み方」

本校教務主任 園田達彦

「歴史教育の方法と実践」 本校教諭 大竹良造

「思考の教材をどのように扱うか」 〃 草野修三

「空気の重さを中心にして」 〃 成田幸夫

□ 第7回 (1975年)

主 題：英才教育の追究 — 知能と学力 —

○記念講演 「現代学校と英才教育」 東京学芸大 学名譽教授 大嶋三男 先生

○研究発表 「知能と学力との接点(2)」 — 知能構造と学業成績を中心にして —

本校主事 園田達彦

○分科会研究発表

国語科 「英才児に於ける感情発達の過程」 本校教諭 草野修三

数学科 「知能因子からみた教材構造」 〃 吉井昇

理科 「理科工作教材を考える」 〃 成田幸夫

地理科 「地図と地球儀に対する児童の認識度」 〃 郡司英幸

□ 第8回 (1976年)

主 題：英才教育の追究 — 高知能児に応じた学習指導 —

○記念講演 「日本教育の課題」 国立教育研究所長 平塚益徳 先生

○研究発表 「知能と行動」 本校校務主任 小林五郎

○分科会研究発表

国語科 「文章理解の方法」 — 子どもの目に捉えられている場面映像はどのようなものか —

本校教諭 葛西琢也

数学科 「数学における英才児の特性」 本校主事 園田達彦

理科 「本校の子どもの理科に関する思考の特性」

本校教諭 成田幸夫

歴 史 「本校歴史科の授業展開」 — 因子別にみた知能の発達段階と

歴史科三段階の目標との関連 —
本 校 教 諭 大 竹 良 造

□ 第9回 (1977年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導 —

○記念講演 「英才教育について」 — 大脳生理学の立場から —

東 京 教 育 大 学
名 誉 教 授 杉 靖 三 郎 先 生

○分科会研究発表

知能教育「知能教育の必要性」 — 知能の発達過程を中心にして —

本 校 主 事 園 田 達 彦

国語科「知能と読みの接点」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

数学科「数学における英才児の特性とその指導法」

本 校 教 諭 吉 井 昇

理 科「科学的な思考方法と知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 諭 成 田 幸 夫

地理科「地理科における知能因子と学習課題との関連」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第10回 (1978年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(2) —

○記念講演 「学校教育の現状と課題」 — 創造性豊かな子どもを育てるために —

筑 波 大 学 教 授 村 松 剛 先 生

○分科会研究発表

幼稚園教育「自主性を育てる遊び」

園 長 和 田 知 雄

知能教育「子どもの知能を伸ばすには」 — 意欲と集中力の育成と家庭の役割 —

本 校 主 事 園 田 達 彦

教科教育「知能開発（活用）をめざした学習指導」

本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎

特別研究「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸

□ 第11回 (1979年)

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(3) —

○記念講演 「生涯教育と学校」

元 文 部 大 臣 永 井 道 雄 先 生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第12回（1980年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした学習指導(4) —

○記念講演 「これからの教育はどうあるべきか」

文部省教科調査官 渡辺富美雄先生

○研究発表 「卒業生の状況」— 追跡とその状況の分析 —

本校主事 園田達彦

□ 第13回（1981年）

主 題：英才教育の追究 — 知能開発をめざした

学習指導(5) —

○記念講演 「未来をみつめての教育」— 子どもの可能性を育てる教育 —

武蔵野音楽大学教授 大竹 武三先生

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼児教育」

知能教育「本園における知能教育」

教科教育（低学年）「知能開発をめざした学習指導」

教科教育（高学年）「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第14回（1983年）

主 題：英才教育の追究 — 英才教育15周年並びに校舎落成記念 —

低学年：知能開発をめざした学習指導(6)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(1)

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

知能教育「本園における知能教育」

国語教育「本校における国語教育」

数学教育「本校における数学教育」

理科教育「本校における理科教育」

地理・歴史教育「本校における地理・歴史教育」

英語・体育教育「本校における英語・体育教育」

□ 第15回 (1984年)

主 題：英才教育の追究

低学年：知能開発をめざした学習指導(7)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(2)

○研究発表「子どものものの見方・考え方」― 国語の授業を通して ―

本校校務主任 小林 五郎

○分科会研究テーマ

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第16回 (1985年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(1)

低学年：知能開発をめざした学習指導(8)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(3)

○研究発表「個性に応じた歴史学習」― イメージから論理的思考へ ―

歴史科主任 大竹 良造

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」

低学年教育「知能開発をめざした学習指導」

高学年教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

中学校教育「一人ひとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第17回 (1986年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(2)

低学年：知能開発をめざした学習指導(9)

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導(4)

○研究発表「知能開発をめざした学習指導」― 地理・数学の授業から ―

教務主任 郡司 英幸

○分科会研究テーマ

教育課程「聖徳学園の教育について」

幼稚園教育「本園における幼稚園教育」
低学年教育「知能開発をめざした学習指導」
高学年教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」
中学校教育「一人びとりの能力や個性に応じた指導」

□ 第18回 (1987年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：考える力を育てる保育(3)
低学年：知能開発をめざした学習指導(10)
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導(5)

○園児・児童・生徒発表

- ① 歌と合奏 幼稚園年長組 指導者 鎌田禮子, 松本阿佐子
- ② 英語劇 「The King's New Clothes (はだかの王様)」〈原作アンゼルセン〉
中学2年生 指導者 米屋清貴, 佐藤久美子, 伊神直彦
- ③ 歌 唱 「山の歌」(夏の山, 山のこもりうた, 山のスケッチ, フニクリフニクラ)
- ④ 児童劇 「ほくたちの……ポチ」〈原作 梶本暁子〉
小学5年生 指導者 内藤茂, 仁科建司

□ 第19回 (1988年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人びとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

- ① 歌 唱 4年生・指導者：林谷英治
- ② 聖徳学園における英才教育
 - 英才教育の基本方針 本 校 主 事 園 田 達 彦
 - 知能教育 本 校 教 務 主 任 郡 司 英 幸
 - 能力に応じた指導 本 校 校 務 主 任 小 林 五 郎
 - 個性に応じた指導 歴 史 科 主 任 大 竹 良 造

□ 第20回 (1989年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育
低学年：知能開発をめざした学習指導
高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 歌 唱 3, 5 年生・指導者：林谷英治, 関戸道成

② 児童劇 4 年生・指導者：板橋裕之

③ 研究発表「聖徳学園における英才教育」

小 松 賢 司 教諭

□ 第21回 (1990年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

低学年：知能開発をめざした学習指導

高学年：一人ひとりの能力や個性に応じた指導

○全体会

① 研究発表「聖徳学園における英才教育」

●知能開発をめざした学習指導

葛 西 琢 也 教諭

●一人ひとりの能力や個性に応じた指導

大 竹 良 造 教諭

② 児童劇 3 年生あずさ組「半日村」・指導者：松崎昭彦教諭・山本友子教諭

③ 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第22回 (1991年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を豊かにする保育

小学校：個性を生かす, その視点と方法を求めて

○全体会

① 講 演「聖徳学園の目指すもの」

— 幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 和 田 知 雄
小 学 校 長

② 歌 唱 4 年生・指導者：林谷英治教諭

③ 歌 唱 5 年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第23回 (1992年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：のびのびとした子どもの活動を助長する保育Ⅱ

小学校：個性を生かす, その視点と方法を求めてⅡ

○全体会

① 講 演「聖徳学園における幼稚園と, 小学校の教育」

— 幼稚園, 小学校の一貫教育について —

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

- ② 研究発表「授業実践を通して『英才児』の個性を探る」

歴史科主任 内藤 茂

- ③ 歌唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第24回 (1993年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (I)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児の作文から，その個性を考える」

研究主任 葛西琢也
教務主任 草野修三

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第25回 (1994年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (II)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (IV)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「英才児は地図をどう描くか — 子どもの空間認識と視点の転換 —」

地理科主任 松崎昭彦

- ③ 歌唱 5年生・指導者：関戸道成教諭

□ 第26回 (1995年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びをもとめて (III)

小学校：個性を生かす，その視点と方法を求めて (V)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践
— 自由研究・特別研究を中心に —」
特別研究科主任 大河内 浩 樹
- ③ 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭

□ 第27回 (1996年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：こどもの知能の発達を助長する遊びを求めて (IV)

小学校：英才児の創造性の開発と育成 (I)

○全体会

- ① 合唱 4年生・指導者：林谷英治教諭
- ② 講演「聖徳学園における幼稚園と小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ③ 研究発表「聖徳学園における創造力育成の実践」
工作科主任 加賀 光悦

□ 第29回 (1997年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VI)

小学校：創造的知能の開発と育成 (II)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「創造性と学習 — 数字の実践から —」
数学科主任 松浦 博和

□ 第30回 (1998年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (VII)

小学校：創造的知能の開発と育成 (III)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」
幼稚園長 園田 達彦
小学校長
- ② 研究発表「卒業生のその後」
教務主任 草野 修三

□ 第31回 (1999年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅷ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅳ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「聖徳の英語教育」

英 語 科 主 任 藤 石 勝 巳

□ 第32回 (2000年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅸ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅴ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「歴史における概念形成のための想像力の育成」

歴 史 科 副 主 任 板 橋 裕 之

□ 第33回 (2001年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：子どもの知能の発達を助長する遊びを求めて (Ⅹ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅵ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼 稚 園 長 園 田 達 彦
小 学 校 長

② 研究発表「創造的知能の開発と育成 — 知能訓練の実践から —」

知 能 訓 練 科 主 任 富 永 理 香 子

□ 第34回 (2002年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導 (担任) 制 (Ⅰ)

小学校：創造的知能の開発と育成 (Ⅶ)

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 研究発表「聖徳学園小学校の理科教育」

理科主任 三輪広明

□ 第35回 (2003年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に対応した複数指導（担任）制（Ⅱ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅷ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

幼稚園長 園田達彦
小学校長

- ② 「創造的知能の開発と育成」— コンクール作品(作文)にみる聖徳児童の創造性—

国語科 内藤 茂

□ 第36回 (2004年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（Ⅲ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅸ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園 幼稚園・小学校の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 「聖徳における二人指導制」— 一人ひとりの個性と能力に応じた指導の追究—

教 頭 加賀光悦

□ 第37回 (2005年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（Ⅳ）

小学校：創造的知能の開発と育成（Ⅹ）

○全体会

- ① 講演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小学校長 園田達彦
幼稚園長

- ② 数学・個性的な解法 — オープンエンドアプローチを通して—

数学科主任 齊藤 勇

□ 第38回 (2006年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（V）

小学校：創造的知能の開発と育成（XI）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 学習発表「詩のボクシングの実践」— 英才児の個性・創造性育成の場として —

6 年 生 児 童 渡 辺 泰 介
国 語 科

□ 第39回 (2007年)

主 題：英才教育の追究

幼稚園：個性と能力差に応じた複数指導（担任）制（VI）

小学校：創造的知能の開発と育成（XII）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 園 田 達 彦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の開発と育成研究 — 発明くふう展にみる聖徳児童の創造性 —

研 究 主 任 松 浦 博 和

□ 第40回 (2008年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成（XIII）

個性と能力差に応じた複数指導（VII）

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園 長

② 知の冒険心を育む学校図書館

司 書 教 諭 江 橋 真 弓

□ 第41回 (2009年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XIV)

個性と能力差に応じた複数指導 (Ⅷ)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 郡 司 英 幸
幼 稚 園

② 聖徳の理科教育について

理 科 主 任 米 持 勇

□ 第42回 (2010年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XV)

個性と能力差に応じた複数指導 (IX)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 聖徳の修学旅行

～子ども達が成長する5泊6日～

地 理 科 主 任 松 崎 昭 彦

□ 第43回 (2011年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVI)

個性と能力差に応じた複数指導 (X)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園

② 創造的知能の育成

～幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ～

知 能 訓 練 科 砂 廣 芳 子

□ 第44回 (2012年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVII)

個性と能力差に応じた複数指導 (XI)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 創造的知能の育成 ～豊かな視点を育てる(数学・地理の授業実践から)～
(幼稚園の知能あそびから小学校の授業へ)

数 学 科 主 任 細 沼 克 吉

□ 第45回 (2013年)

主 題：英才教育の追究

創造的知能の開発と育成 (XVIII)

個性と能力差に応じた複数指導 (XII)

○全体会

① 講 演「聖徳学園小学校・幼稚園の教育」

小 学 校 長 加 賀 光 悦
幼 稚 園 長

② 未来をひらく戦士を育てるために

～ 一年生の学級経営を中心に ～ 低 学 年 主 任 由 里 敏 夫

研 究 同 人

(平成26年度)

[理事長]

長 尾 央

[聖徳幼稚園]

園 長 加 賀 光 悦

教 頭 松 浦 博 和

主 任 飯 濱 久美子

副 主 任 永 坂 圭 子

生活指導主任 岩 瀬 勝 彦

年 少 担 任 飯 濱 久美子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 大 下 真由美 (知能あそび・体育あそび)

〃 荒 井 明 子 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 田 崎 満利恵 (知能あそび・体育あそび)

年 中 担 任 園 山 恵理子 (造形あそび・リトミックあそび)

〃 高 井 正 恵 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 久 保 千 春 (知能あそび・体育あそび)

年 長 担 任 永 坂 圭 子 (体育あそび・知能あそび)

〃 神 山 祐 希 (リトミックあそび・造形あそび)

〃 磯 沼 美 紀 (リトミックあそび・造形あそび)

専 科

教 諭 佐 藤 憲 夫 (体育あそび)

講 師

〃 大 嶋 比查子 (知能あそび)

〃 粕加屋 恵 子 (知能あそび)

〃 松 浦 雅 美 (知能あそび)

〃 上ノ宮 純 子 (延長保育)

〃 大 槻 妙 子 (延長保育)

〃 佐久間 由 紀 (延長保育)

[聖徳学園小学校]

校 長 加 賀 光 悦

教 頭 松 浦 博 和

教 頭 和 田 知 之

教 務 主 任 粕加屋 直 幸

研 究 主 任 大河内 浩 樹

生活指導主任 齋 藤 勇

低学年主任 板 橋 裕 之

高学年主任 由 里 敏 夫

講 師	草 野 修 三 (国語・地理)
〃	藤 原 陽 子 (英語)
〃	大 嶋 比 查 子 (知能訓練)
〃	粕加屋 恵 子 (知能訓練)
〃	松 村 英 恵 (美術)
〃	内 藤 晴 美 (知能訓練)
〃	山 田 桂 子 (知能訓練)
〃	アダム・イスフェンディヤー (英語)
〃	須 藤 泰 規 (美術)
テ ス タ ー	山 田 多 津 子 (知能検査)
〃	佐 藤 智 子 (知能検査)
事 務 次 長	道 旗 え り 子
事 務	萩 原 夏 美 (庶務・経理)
〃	澁 谷 香 耶 (庶務・経理)
環 境 美 化	岩 瀬 勝 彦
〃	小 池 き み 江

第 46 回 公開研究発表会要項

発 行 日 平成 26 年 6 月 21 日
編集企画委員 松 浦 博 和
飯 濱 久美子
豊 田 奈都代
発 行 者 加 賀 光 悦
発 行 所 聖 徳 学 園
東京都武蔵野市境南町 2-11-8
TEL (0 4 2 2) 3 1 - 3 8 3 9
印 刷 所 株式会社 文 伸